WebSphere Business Integration Server
Express and Express Plus

# WebSphere Business Integration Server Express インストール・ガイド (OS/400 および i5/OS 版)

*4.4*

WebSphere Business Integration Server
Express and Express Plus

# WebSphere Business Integration Server Express インストール・ガイド (OS/400 および i5/OS 版)

*4.4*

**お願い**

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、 73 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.4 および IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.4 に適用されます。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

http://www.ibm.com/jp/manuals/ の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

**原　典：** WebSphere Business Integration Server Express
Installation Guide for OS/400 and i5/OS
4.4

**発　行：** 日本アイ・ビー・エム株式会社

**担　当：** ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2005.5

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財) 日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

**© Copyright International Business Machines Corporation 2004, 2005. All rights reserved.**

© Copyright IBM Japan 2005

# 目次

**本書について . . . . . v**
対象読者 . . . . . v
関連資料 . . . . . v
表記上の規則 . . . . . vi

**本リリースの新機能 . . . . . vii**
リリース 4.4 の新機能 . . . . . vii
リリース 4.3.1 の新機能 . . . . . vii

**第 1 章 インストールの概要 . . . . . 1**
次のステップに進む . . . . . 2

**第 2 章 Launchpad の始動 . . . . . 3**
始動前の準備 . . . . . 3
Launchpad の起動 . . . . . 4
次のステップに進む . . . . . 5

**第 3 章 必要なソフトウェア前提条件と WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール . . . . . 7**
インストールするコンポーネントの決定 (「カスタム」インストールのみ) . . . . . 8
「標準」インストール . . . . . 10
「カスタム」インストール . . . . . 16
ソフトウェア前提条件 . . . . . 24
インストールの結果 . . . . . 27
First Steps の使用 . . . . . 28
ディレクトリー構造およびファイル . . . . . 31
初期インストール後の追加コンポーネントのインストール . . . . . 33
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール . . . . . 34
次のステップに進む . . . . . 36

**第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの初回の始動 . . . . . 37**
WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動 . . . . . 37
InterChange Server Express のセットアップ . . . . . 38
次のステップに進む . . . . . 40

**第 5 章 インストールの検証 . . . . . 41**
Quick Validate . . . . . 41
次のステップに進む . . . . . 41

**第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール . . . . . 43**
Adapter Capacity Pack のインストール . . . . . 43
Adapter Capacity Pack のアンインストール . . . . . 45
次のステップに進む . . . . . 46

**第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール . . . . . 47**
Collaboration Capacity Pack のインストール . . . . . 47
Collaboration Capacity Pack のアンインストール . . . . . 50

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

次のステップに進む . . . . . 51

**第 8 章 WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus . . . 53**
サポートされるアップグレード・シナリオと前提事項 . . . . . 53
既存のユーザー・プロジェクトの保存 . . . . . 54
ソフトウェア前提条件のアップグレード . . . . . 56
既存のシステムの準備 . . . . . 57
アップグレード・プロセスの開始 . . . . . 60
アップグレードの検証 . . . . . 66
アップグレード・バージョンのテスト . . . . . 66
アップグレードしたバージョンのバックアップ . . . . . 67
次のステップに進む . . . . . 67

**付録. サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストール. . . . . 69**
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール . . . . . 69
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール . . . . . 70
Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール . . . . . 70
Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール . . . . . 71
Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール . . . . . 71
Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール. . . . . 72

**特記事項 . . . . . 73**
プログラミング・インターフェース情報 . . . . . 74
商標 . . . . . 75

**索引 . . . . . 77**

# 本書について

IBM(R) WebSphere(R) Business Integration Server Express 製品および IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品は、InterChange Server Express、関連する Toolset Express、Collaboration Foundation、およびソフトウェア統合アダプターのセットで構成されています。Toolset Express に含まれるツールは、ビジネス・オブジェクトの作成、変更、および管理に役立ちます。プリパッケージされている各種アダプターは、お客様の複数アプリケーションにまたがるビジネス・プロセスに応じて、いずれかを選べるようになっています。標準的な処理のテンプレートである CollaborationFoundation は、カスタマイズされたプロセスを簡単に作成できるようにするためのものです。

本書では、IBM WebSphere Business Integration Server Express システムおよび IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus システムのインストール方法とセットアップ方法について説明します。

特に明記されていない限り、本書の情報は、いずれも、IBM WebSphere Business Integration Server Express と IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus の両方に当てはまります。WebSphere Business Integration Server Express という用語と、これを言い換えた用語は、これらの 2 つの製品の両方を指します。

## 対象読者

本書は、OS/400 および i5/OS 環境で WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール、配置、および管理を担当するコンサルタントやシステム管理者を対象としています。

## 関連資料

本書の対象製品の一連の関連文書には、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のどのインストールにも共通する機能とコンポーネントの解説のほか、特定のコンポーネントに関する参考資料が含まれています。

関連文書は、`http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter` でダウンロード、インストール、および表示することができます。

**注:** 本書の発行後に公開されたテクニカル・サポートの技術情報や速報に、本書の対象製品に関する重要な情報が記載されている場合があります。これらの技術情報や速報は、WebSphere Business Integration のサポート Web サイト (`http://www.ibm.com/software/integration/websphere/support/`) で参照できます。適切なコンポーネント領域を選択し、「Technotes (技術情報)」セクションと「Flashes (速報)」セクションを参照してください。

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

## 表記上の規則

本書は、次の規則に従って編集されています。

| | |
|---|---|
| `Courier フォント` | コマンド名、ファイル名、入力情報、システムが画面に出力した情報など、リテラル値を示します。 |
| **太字** | 初出語を示します。グラフィカル・ユーザー・インターフェースに表示される名前またはメニュー項目を示す場合もあります。 |
| *イタリック* | 変数名または相互参照を示します。PDF ファイルを表示した場合、相互参照は青色のイタリック体で表示されます。相互参照を選択すると、目的の情報にジャンプできます。 |
| *イタリック courier* | リテラル・テキストの中の変数名を示します。 |
| 青のアウトライン | オンラインで表示したときにのみ見られる青のアウトラインは、相互参照用のハイパーリンクです。アウトラインの内側を選択すると、参照先オブジェクトにジャンプします。 |
| `{ }` | 構文の記述行の場合、中括弧 { } で囲まれた部分は、選択対象のオプションです。1 つのオプションのみを選択する必要があります。 |
| `[ ]` | 構文の記述行の場合、大括弧 [ ] で囲まれた部分は、オプションのパラメーターです。 |
| `...` | 構文の記述行の場合、省略符号 ... は直前のパラメーターが繰り返されることを示します。例えば、`option[,...]` は、複数のオプションをコンマで区切って指定できることを意味します。 |
| ¥ | 本書では、ディレクトリー・パスの規則として円記号 (¥) を使用します。UNIX システムの場合には、円記号 (¥) はスラッシュ (/) に置き換えてください。すべての IBM WebSphere Business Integration Server Express のパス名は、ご使用のシステムにおいてこの製品がインストールされているディレクトリーを基準とした相対パスです。 |
| *ProductDir* | 製品のインストール先ディレクトリーを表します。 |

# 本リリースの新機能

## リリース 4.4 の新機能

このリリースでは、インストールで以下の変更が加えられ、このガイドに反映されています。

- 「標準」および「カスタム」の新規インストール・オプション
- First Steps アプリケーションのインストール
- 「Quick Start」は「Quick Validate」と呼ばれるようになりました。First Steps の組み込みオンライン資料でサポートされています。
- コンソールは (Toolset Express 内の) 管理ツールの一部となったため、個別にインストールされません。
- 統合テスト環境 (ITE) は、OS/400 または i5/OS 上の InterChange Server Express でサポートされます。Windows システム上では稼働させる必要はありません。したがって、OS/400 または i5/OS システムに加えて Windows システムに InterChange Server Express をインストールすることはできません。
- Web Deployment アプリケーションのインストール
- 役割ベースのアクセス制御と、ユーザーが定義可能なユーザー名およびパスワード
- WebSphere Business Integration Server Express (または Express Plus) 4.3.1 および 4.4 と同じシステム上へのインストールのサポート
- MQ キュー・マネージャーおよび MQ リスナーの削除の手順が提供されています。キュー・マネージャーが別のアプリケーションによって使用されている場合、自動的に削除されることはありません。

## リリース 4.3.1 の新機能

本書の最初のリリースです。リリース 4.3.1 には、以下のオペレーティング・システムに対する実動モードでのサポートがあります。

- IBM OS/400 V5R2、V5R3
- Red Hat Enterprise Linux AS 3.0 (Update 1 を適用)
- SuSE Linux Enterprise Server 8.1 SP3
- Microsoft Windows 2003

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

# 第 1 章 インストールの概要

IBM WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus 製品には、Launchpad と呼ばれるグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) ベースのセットアップ・プログラムが組み込まれています。Launchpad は、前提条件ソフトウェアと製品ソフトウェアのインストールおよび構成の方法をステップバイステップに示します。

インストールは、製品を OS/400 または i5/OS システムにリモート側でインストールする Windows システムを使用して行われます。したがって、OS/400 または i5/OS システムは、インストールに使用する予定の Windows システムとネットワークで接続されている必要があります。製品には、Windows ベースのシステム上でのみ稼働するコンポーネントが含まれています。これらのコンポーネントは、ソフトウェア・ツール (「Tools Express」)、および製品のセットアップ、構成、カスタマイズ、および管理に使用できる「First Steps」アプリケーションで構成されています。必要に応じて、インストール・プログラムによって、OS/400 または i5/OS システムと Windows システムの両方にファイルがインストールされます。

Launchpad を使用すると、デフォルトのコンポーネント一式を自動的にインストールする「標準」インストールか、またはインストールするコンポーネントを選択できる「カスタム」インストールを実行できます。いずれの場合も、Launchpad は、システムにその他の必要な前提条件ソフトウェアが既にインストールされているかどうかを検出し、この情報を表示します。前提条件ソフトウェアがインストールされると、Launchpad は、インストールが完了するまで引き続き手順を示します。

本書では、IBM WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を動作させるために必要な、インストールや初期構成のプロセスの各手順について詳細に説明します。主な手順は次のとおりです。

1. この製品をインストールする予定のシステムが、ハードウェア要件およびソフトウェア要件を満たしていることを確認します。固有の要件については、`http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress` を参照してください。
2. Launchpad を始動し、そこから製品のインストールを開始します。(第 2 章)
3. 「標準」インストールと「カスタム」インストールのどちらにするかを決定します。標準インストールとカスタム・インストールの違いについては、3 章を参照してください。Launchpad により、サポートされている前提条件ソフトウェアが検査されます。サポートされている前提条件ソフトウェアのリストについては、`http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress` を参照してください。次に、残りの Launchpad インストール・プロセスに進みます。(第 3 章)
4. 必要な追加構成手順がある場合は、それを実行します。(第 3 章)
5. システムを始動して、初期管理を実行します。(第 4 章)
6. (オプションですが実行を推奨します。) First Steps 内にある「Quick Validate」プロシージャーを使用して、システムがインストールされ、正しく動作していることを確認します。(第 5 章)

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

7. (WebSphere Business Integration Server Express Plus の場合のみオプション) Adapter Capacity Pack をインストールします。(第 6 章)
8. (WebSphere Business Integration Server Express Plus の場合のみオプション) Collaboration Capacity Pack をインストールします。(第 7 章)

本書のその他の章では、以下について説明します。

- 53 ページの『第 8 章 WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus』
- 69 ページの『サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストール』

## 次のステップに進む

インストールおよび構成のプロセスを開始するには、3 ページの『第 2 章 Launchpad の始動』に進んで、Launchpad の基本機能を学習します。

# 第 2 章 Launchpad の始動

Launchpad GUI を使用して WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールおよび構成を順を追って行うには、基本的な機能を習得する必要があります。

この章の内容は以下のとおりです。


- 『始動前の準備』
- 4 ページの『Launchpad の起動』
- 5 ページの『次のステップに進む』


## 始動前の準備

Launchpad を始動する前に、以下の作業を行います。

- ご使用の OS/400 または i5/OS ユーザー・プロファイルに、`*ALLOBJ`、`*SECADM`、`*JOBCTL` 特殊権限があることを確認します。
- ご使用の OS/400 または i5/OS システムが、`http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress/` にリストされたハードウェア要件を満たしていることを確認します。
- Windows クライアントで Tools Express コンポーネントを使用する場合、ご使用の Windows システムが、`http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress/` にリストされたハードウェア要件を満たしていることを確認します。
- 製品に有効なフィックスパックがあるかどうかを、次のサイトで確認します。`http://www.ibm.com/software/integration/websphere/support/`
- Windows システムで、すべての Windows アプリケーションがシャットダウンされていることを確認します。
- Windows システムで、Windows の管理者特権と、20 文字未満の Windows ユーザー ID を保持していることを確認します。この要件に適合していないと、問題の概要を示したエラー・メッセージが表示され、Launchpad プログラムが終了します。
- 本書におけるインストールの指示は、製品 CD からのインストールを想定しています。パスポート・アドバンテージから入手した ESD からインストールしている場合は、以下の手順を実行します。
  - ダウンロード手順については、使用するパスポート・アドバンテージの情報を参照してください。
  - すべての ESD をハードディスク・ドライブ上の同じディレクトリーに解凍し、このハードディスク・ドライブからインストールして、正常なインストーラー機能を確保できるようにします。ESD イメージを基にして CD を作成して、その CD からインストールするようなことはしないでください。そのようにした場合、一部のソフトウェア前提条件の構成ユーティリティーは、実際の前提条件ソフトウェアが含まれている ESD にパッケージされないため、インストールに失敗する可能性があります。

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

– ESD の解凍先ディレクトリーのコンポーネント・フォルダーの名前にスペースがないことを確認します。例えば、C:¥Program Files¥WBISE は、フォルダーの名前 Program Files にスペースが入っているため、無効なディレクトリーです。C:¥WBISE は、フォルダー名 WBISE にスペースが入っていないため、有効なディレクトリーです。

- 新規データベースの作成および新規ユーザーの追加を行うための管理者特権があることを確認します。

## Launchpad の起動

Launchpad を起動するには、WebSphere Business Integration Server Express OS/400 および i5/OS の CD をご使用の Windows ベースのコンピューターに挿入します。i5/OS のシステム情報画面が表示され、OS/400 または i5/OS のシステム名、ユーザー ID、およびパスワードを求めるプロンプトが出されます。情報を入力して、「**OK**」をクリックします。

例:

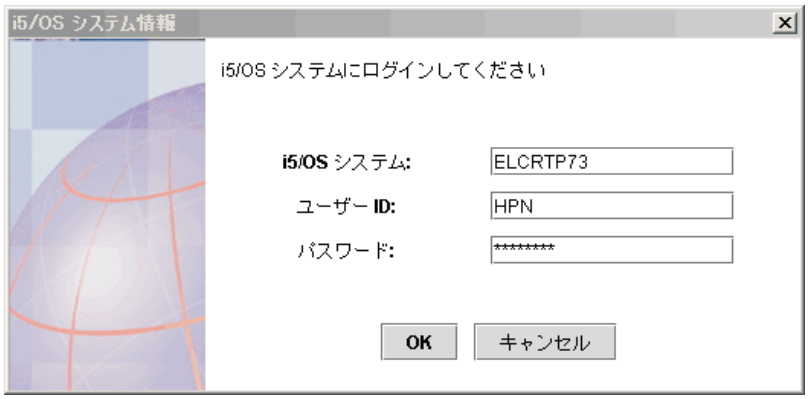


*図 1. ログイン情報を入力する OS/400 および i5/OS のシステム情報画面*

**注:** ユーザー・インターフェースには「i5/OS システム情報」というラベルが付いていますが、このインターフェースはサポートされる OS/400 システムでも機能します。この製品のインストール時に表示される「i5/OS」というラベルの付いたインストール・ユーザー・インターフェースのその他の部分についても同様です。

Launchpad の「ようこそ」画面が表示されます。「ようこそ」画面の左側のボタンを使用すれば、いくつかのタスクを即時に選択できます。

図 1 は、WebSphere Business Integration Server Express Plus の Launchpad の「ようこそ」画面の例です。WebSphere Business Integration Server Express の Launchpad の画面は、WebSphere Business Integration Server Express Plus の Launchpad の画面 (下図) とは少し異なることに注意してください。WebSphere Business Integration Server Express Plus の Launchpad には、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルのボタンが表示されるからです。このボタンからインストールできる項目は、WebSphere Business Integration Server Express では使用できません。

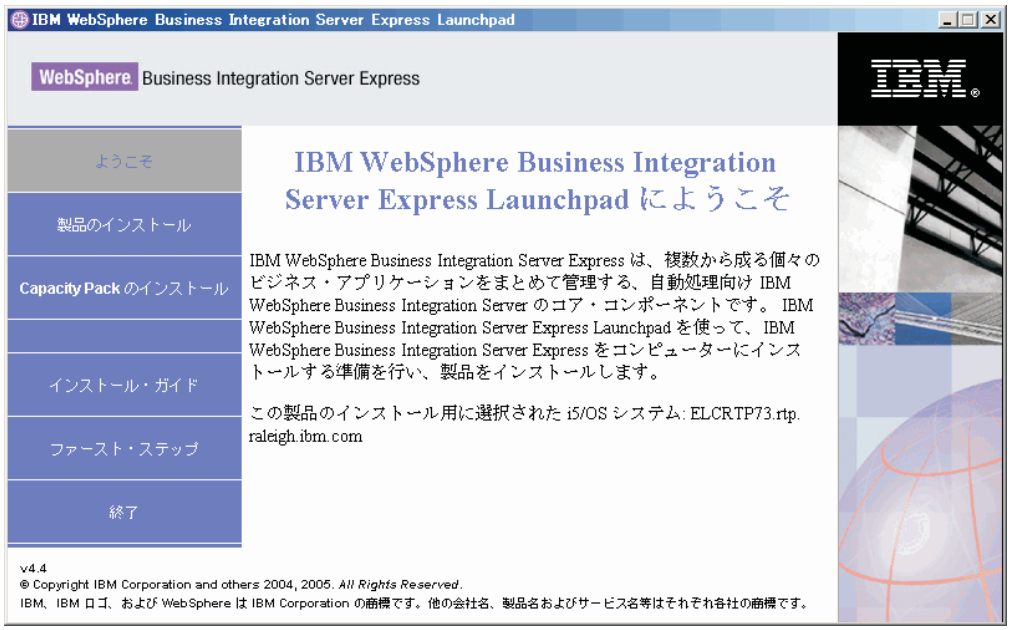


*図 2. WebSphere Business Integration Server Express Plus Launchpad の「ようこそ」画面*

「ようこそ」画面のボタンによって制御されるタスクは、次のとおりです。

**製品のインストール**
: インストールする製品コンポーネントに基づいて、適切なソフトウェア前提条件をインストールするようユーザーをガイドし、さらに製品コンポーネントもインストールします。

**Capacity Pack のインストール**
: ベース・インストールで提供される以外のコラボレーションまたは追加アダプターをインストールすることができます (WebSphere Business Integration Express Plus のみで使用可能)。

**インストール・ガイド**
: WebSphere Business Integration Server Express Information Center に誘導する Web ページにリンクします。Information Center から、このインストール・ガイドを含むすべての製品の資料を入手できます。

**ファースト・ステップ**
: First Steps アプリケーションを起動します。First Steps アプリケーションは、単一のインターフェースで、インストールの完了後は、これを使用して WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を使用および管理します。

**終了**　Launchpad を終了します。

## 次のステップに進む

この章で概説されている Launchpad GUI の基本操作の実行に問題がない場合は、7 ページの『第 3 章 必要なソフトウェア前提条件と WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール』に進み、必要な前提条件ソフトウェアの確認、選択された前提条件ソフトウェアのインストール、および

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールを実行するために Launchpad を使用する方法についての説明を参照してください。

# 第 3 章 必要なソフトウェア前提条件と WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムは、インストールする予定のコンポーネントに基づいて、インストールに必要な前提条件ソフトウェアを決定します。特定の項目がインストールされていない場合は、それらの項目をインストールできます。

Launchpad には、「標準」と「カスタム」の 2 種類のインストール・オプションが用意されています。

「標準」インストールでは、以下のコンポーネントが自動的にインストールされます。

- InterChange Server Express
- JText Adapter
- サンプル
- Toolset Express

これらのコンポーネントの詳細については、9 ページの『インストールに使用できるコンポーネント』を参照してください。

「標準」インストールでは、必要な前提条件のコンポーネントがあることと、その大半がインストール可能かどうかも自動的に検出されます。

「カスタム」インストールでは、インストールするコンポーネントを選択できます。「標準」インストールの場合と同様に、前提条件のコンポーネントがインストールされていることとそれらをインストールできるかどうかも検出されます。選択可能なコンポーネントの詳細は、8 ページの『インストールするコンポーネントの決定 (「カスタム」インストールのみ)』 のセクションを参照してください。「カスタム」インストールの詳細は、16 ページの『「カスタム」インストール』のセクションを参照してください。

「標準」インストール・オプションの詳細は、10 ページの『「標準」インストール』のセクションを参照してください。

インストールの説明では、この章全体を通して以下の事項を前提にしています。

- ホスト・サーバーは OS/400 または i5/OS システム上で始動されます (パラメーター `SERVER(*ALL)` を指定した `STRHOSTSVR CL` コマンドを使用します)。インストールを成功させるためには、ホスト・サーバーを始動する必要があります。
- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus バージョン 4.4 は、まだマシンにインストールされていない。以前のバージョンの製品または Capacity Pack がインストールされていて、これらをバージョン 4.4 にアップグレードする場合や、WebSphere Business Integration Server Express V4.4 がインストールされていて、これを WebSphere Business Integration Server Express Plus

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

V4.4 にアップグレードする場合は、手順について 53 ページの『第 8 章 WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus』 を参照してください。

- Server Express コンポーネントは、バージョン 5 リリース 2 の OS/400 または バージョン 5 リリース 3 の i5/OS のいずれかにインストールされます。Tools Express コンポーネントは、Windows XP または Windows 2003 オペレーティング・システムが稼働しているマシンにインストールされます。実稼働環境と開発環境の両方の各 Windows プラットフォームでサポートされている製品コンポーネントの一覧については、`http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress/` を参照してください。
- インストールは、WebSphere Business Integration Server Express Plus システムに関するものです。WebSphere Business Integration Server Express システムをインストールする場合は、表示される画面が少し異なります。
- 読者は、 3 ページの『第 2 章 Launchpad の始動』の情報を読んで理解し、Launchpad を起動済みであるとします。

この章の内容は以下のとおりです。


- 『インストールするコンポーネントの決定 (「カスタム」インストールのみ)』
- 10 ページの『「標準」インストール』
- 16 ページの『「カスタム」インストール』
- 24 ページの『ソフトウェア前提条件』
- 28 ページの『First Steps の使用』
- 31 ページの『ディレクトリー構造およびファイル』
- 33 ページの『初期インストール後の追加コンポーネントのインストール』
- 34 ページの『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール』
- 36 ページの『次のステップに進む』


サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、 69 ページの『サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストール』を参照してください。

## インストールするコンポーネントの決定 (「カスタム」インストールのみ)

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus を「カスタム」インストールを使用してインストールするときは、製品コンポーネントの全部または一部のサブセットをインストールできます。インストール可能なコンポーネントは、Launchpad の「セットアップ・タイプを選択してください」画面から、またはサイレント・インストール時に使用される応答ファイル内から「**カスタム**」ボタンを選択すると表示される画面で選択できます。

**注:** 前述したように、「標準」インストールでは、インストール対象のコンポーネントが Launchpad によって自動的に検出されます。

以下のセクションで、インストール可能なコンポーネントについて説明します。

Toolset Express は Windows ベースのシステム上で稼働します。Windows 2003 プラットフォームの実稼働環境または開発環境でサポートされます。Windows XP プラットフォームでは、開発環境でのみサポートされます。

InterChange Server Express および Toolset Express コンポーネントの詳細については「*システム管理ガイド*」、アダプターの詳細については個々のアダプター・ガイドを参照してください。すべての文書は、Web サイト `http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter` で参照できます。

## インストールに使用できるコンポーネント

インストール時に、以下のコンポーネントのセットから選択できます。

- InterChange Server Express
- Toolset Express。以下のサブコンポーネントが含まれます。
  - 管理ツール - さまざまなシステム環境を管理およびモニターします。これには、OS/400 または i5/OS システム上でコンポーネントを管理するコンソール、System Manager、Flow Manager、Log Viewer、および Relationship Manager が含まれます。
  - 開発ツール - 新規または既存のシステム・コンポーネントを構成、カスタマイズ、または作成します。これらには、Business Object Designer Express、Connector Configurator Express、Map Designer Express、Process Designer Express (WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストールでのみ使用可能)、Relationship Designer Express、および Test Connector Express が含まれます。また、WebSphere Studio WorkBench 3.0.1 (WSWB301) も含まれます。

  Web ベース・ツールを構成する要素は、次のとおりです。
  - System Monitor
  - Failed Event Manager
  - Web Deployment
- 次のリストから選択したアダプター。
  - Adapter for e-Mail
  - Adapter for iSeries
  - Adapter for JDBC
  - Adapter for JMS
  - Adapter for JText
  - Adapter for Lotus Domino
  - Adapter for Healthcare Data Protocols
  - Adapter for HTTP
  - Adapter for SWIFT
  - Adapter for TCP/IP
  - Adapter for Web Services
  - Adapter for WebSphere Commerce
  - Adapter for WebSphere MQ
  - Adapter for XML

**注:** 一部のアダプターには対応する Object Discovery Agents (ODA) があり、それらのアダプターが選択されると、その ODA がインストールされます。いずれのアダプターを選択した場合も、次のコンポーネントがインストールされます。

- Data Handler for EDI
- Data Handler for XML

- サンプル・コンポーネントは、System Test と呼ばれる構成済みのサンプルをインストールします。この System Test を実行すれば、インストールが正しく行われ、正常に動作するかを検証できます。

## 「標準」インストール

「標準」インストールを開始するには、以下の手順に従います。

1. 「ようこそ」画面で、「**製品のインストール**」を選択します。

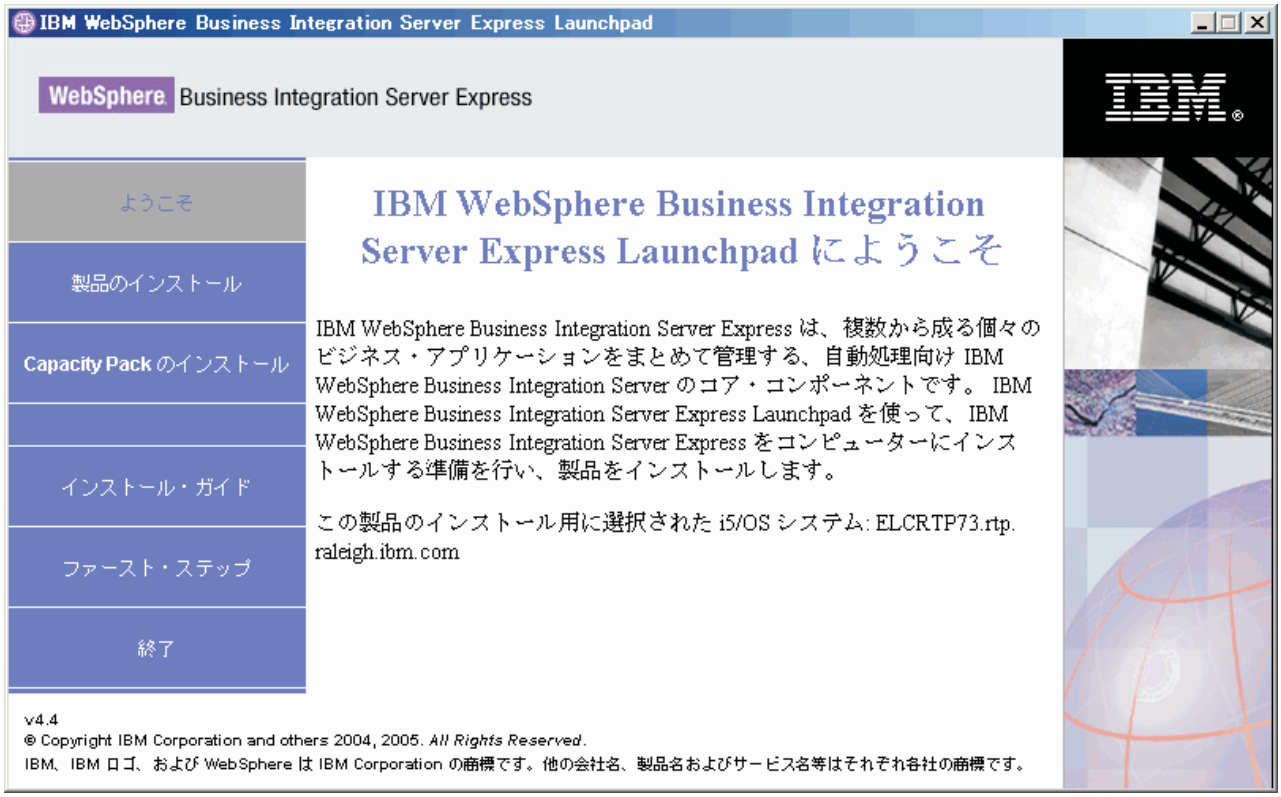


*図 3. 「ようこそ」画面*

「セットアップ・タイプを選択してください」画面が表示されます。

2. 「セットアップ・タイプを選択してください」画面で、「**標準**」を選択します。

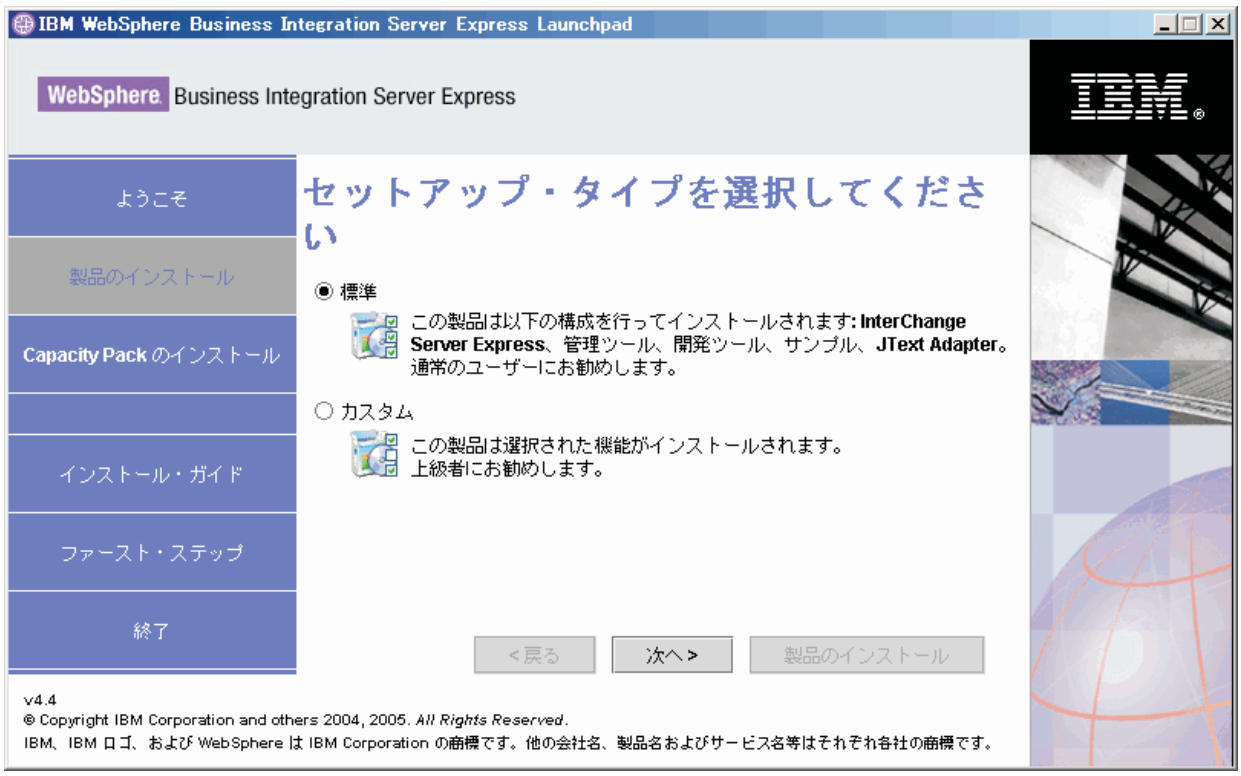


*図 4. 「セットアップ・タイプを選択してください」画面*

「標準」インストールを選択すると、「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

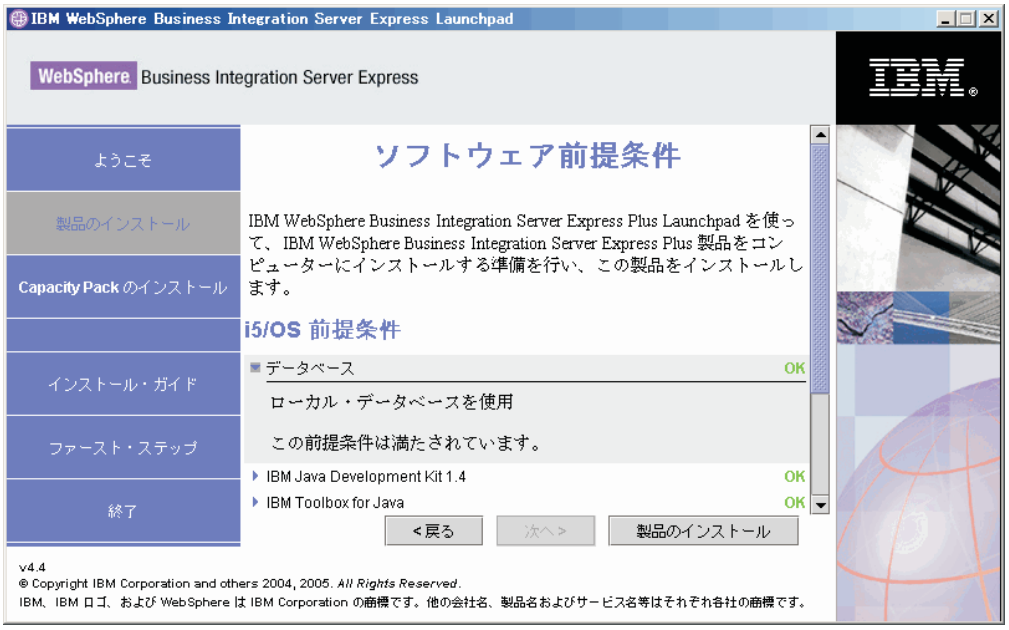


*図 5. 「ソフトウェア前提条件」画面*

3. Launchpad には、各前提条件のインストール状況が表示されます。状況値としては、「**未インストール**」、「**オプション**」、または「**OK**」があります。また、データベース選択に関してのみ、「**未構成**」があります。

   システムに必要なソフトウェア・プログラムの状況が「**未インストール**」または「**オプション**」である場合は、Launchpad を使用して、対象のソフトウェアをインストールするか、または入手先を通知するようにできます。

   Launchpad を使用してソフトウェア・プログラムをインストールするには、製品名または項目名をクリックします。その他の選択可能なボタンまたはオプションが表示されます。例えば、「**インストール**」ボタンが使用可能になります。「**インストール**」ボタンを選択して、プログラムのインストールを開始します。ソフトウェア・プログラムのインストール・プロセスが完了すると、「ソフトウェア前提条件」画面に戻り、プログラム名の横に「**OK**」が表示されます。

   (「カスタム」インストールのみ。) DB2 Universal Database for iSeries が「**未構成**」である場合、Launchpad を使用して構成することができます。「データベース」という語をクリックして開始します。追加のフィールドが表示されます。データベースを構成する前に重要な情報を取得するには、 26 ページの『データベースのインストールおよび構成』を参照してください。

   **注:** このシステムに前提条件ソフトウェアの旧バージョンが既にインストールされている場合、Launchpad の動作の詳細と、バージョンに応じた必要な処理の詳細については、 56 ページの『ソフトウェア前提条件のアップグレード』を参照してください。

   特定の前提条件ソフトウェアをインストールする必要がある理由など、前提条件ソフトウェアのインストールの詳細は、 24 ページの『ソフトウェア前提条件』のセクションを参照してください。「カスタム」インストールの場合、この画面には図に示されているよりも多くの前提条件が表示されることに注意してください。さらに、画面には OS/400 または i5/OS システムと Windows クライアントの両方の前提条件が表示されます。

   予定しているインストールに必要な前提条件ソフトウェアの状況が「**OK**」になったら、画面の下部にある「**製品のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

   「ソフトウェア・ライセンス情報」画面が表示されます。

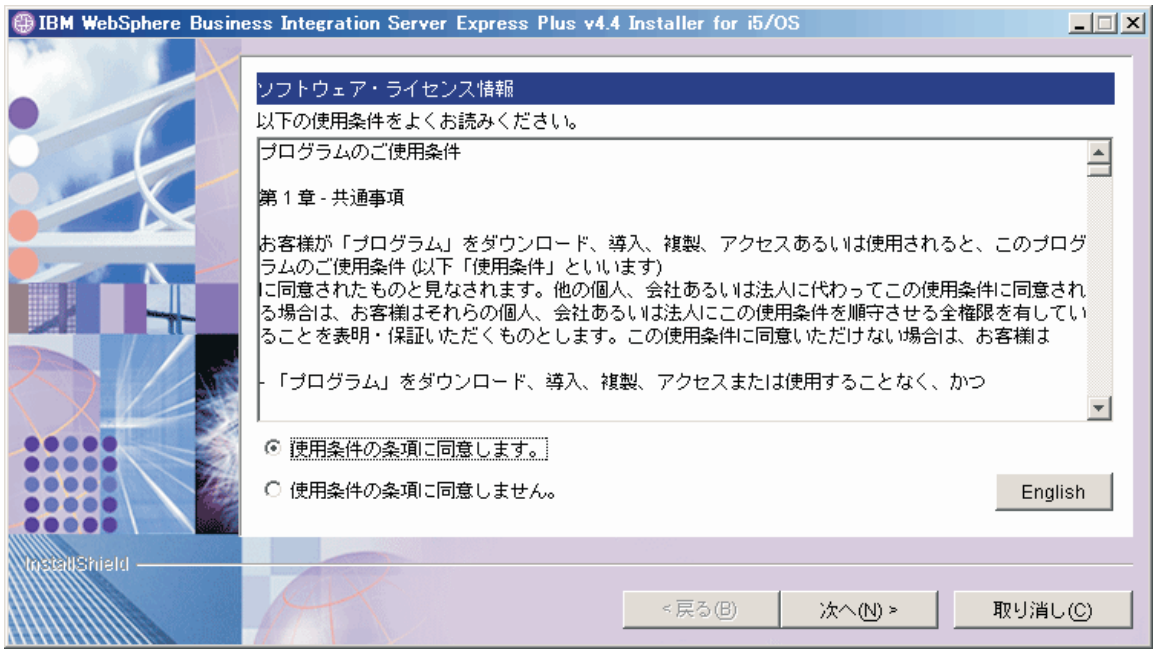


*図 6. 「ソフトウェア・ライセンス情報」画面*

4. ソフトウェア・ライセンス情報の条件を読み、「**使用条件の条項に同意します。**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

   「RBAC 情報」画面が表示されます。

   **注:** カスタム・インストールの実行中に Web ベース・ツールのインストールが選択されると、次の画面は「Web ベース・ツール・ポートの構成 (web-based tools port configuration)」画面になります。その次には「RBAC 情報」画面が表示されます。 23 ページの『「カスタム」インストールの追加情報』で「Web ベース・ツール・ポートの構成 (web-based tools port configuration)」画面の詳細を参照してからこのセクションに戻り、作業を継続してください。

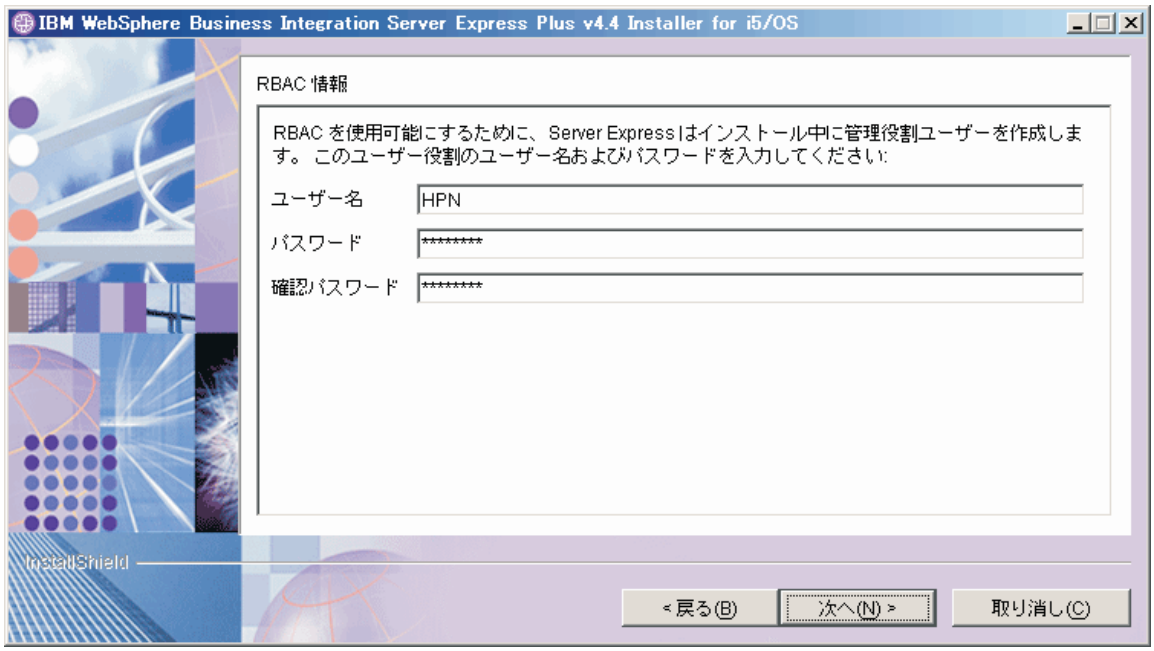


*図 7. 「RBAC 情報」画面*

5. Role-Based Access Control (RBAC) を使用可能にするには、「ユーザー名」と「パスワード」を入力して、「**次へ**」を選択します。

   入力したユーザー名とパスワードのメモを取っておいてください。後で必要になります。

   **注:** RBAC には、サーバー・アクセスのセキュリティーを向上する機能があります。入力したユーザー名とパスワードは、サーバーへの配置時にサーバー管理者の役割を作成するときに使用します。この情報は InterChangeSystem.cfg ファイルに格納されます。その際、パスワードは暗号化されます。RBAC に関する役割の追加やパスワードの変更がある場合は、後で System Manager を使用して実行する必要があります。

   サマリー画面が表示されます。

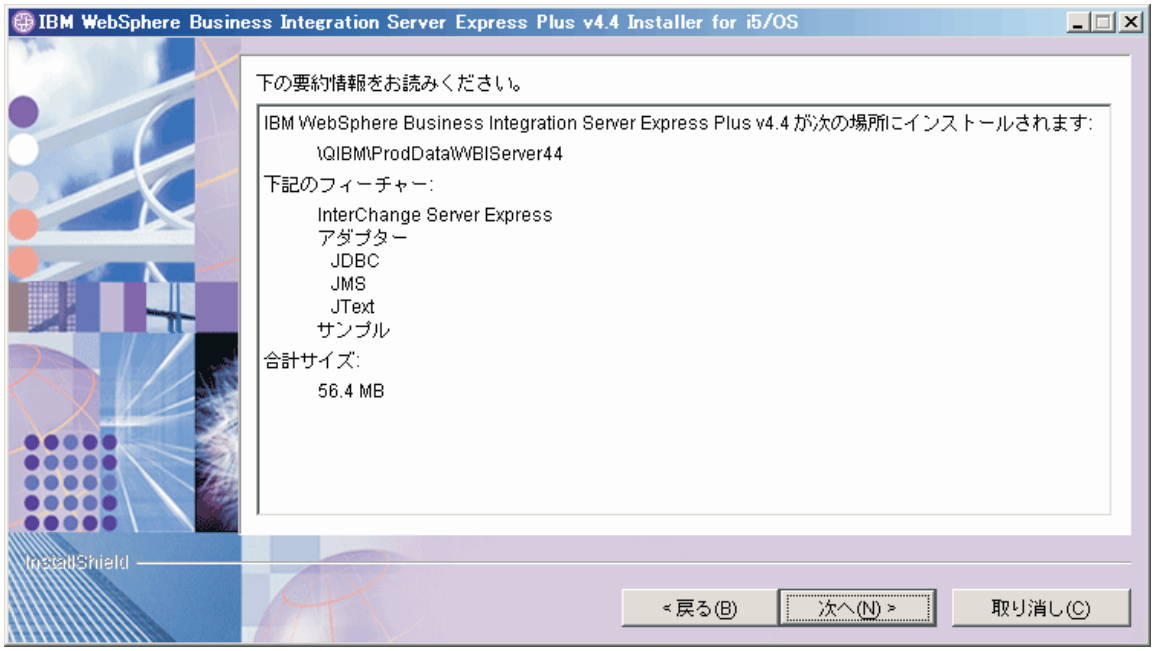


*図 8. OS/400 または i5/OS にインストールされているコンポーネントの「プリインストール・サマリー (Pre-installation summary)」画面*

6. 「プリインストール・サマリー (Pre-installation summary)」画面には、選択したインストール選択項目の要約が表示されます。これらのすべてのコンポーネントは、OS/400 または i5/OS システムにインストールされます。内容を読んで正しいことを確認し、「**次へ**」を選択します。

   インストール・プロセスが開始されます。インストールが進行中であることを示すステータス・バーが表示されます。さまざまなメッセージによって、どのコンポーネントがインストール中または構成中であるかが示されます。この処理は、ご使用のシステムに応じて多少時間がかかります。

   インストール・プロセスが開始すると、インストーラーは、インストール用に十分なディスク・スペースがあるかどうかを検査します。十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「**戻る**」ボタンと「**取り消し**」ボタンのみが使用可能になっているパネルが表示されます。この場合、特定ドライブ上のスペースをある程度解放する必要があります。

7. インストールが完了すると、「結果」画面が表示されます。インスタンスの作成中にエラーが発生すると、この画面にはエラーも表示されます。サマリー画面の前に「結果」画面が表示されない場合、`QWBIDFT44.create` ログ・ファイルを参照して、ログの最後に正常終了のメッセージがあることを確認してください。ログ・ファイルは、OS/400 または i5/OS システムの `/QIBM/UserData/WBIServer44/Logs/QWBIDFT44.create` に配置されています。「結果」画面が表示されたら、その画面で「**次へ**」をクリックします。表示されない場合、ステップ 8 に進んでください。

8. サマリー画面が表示されます。

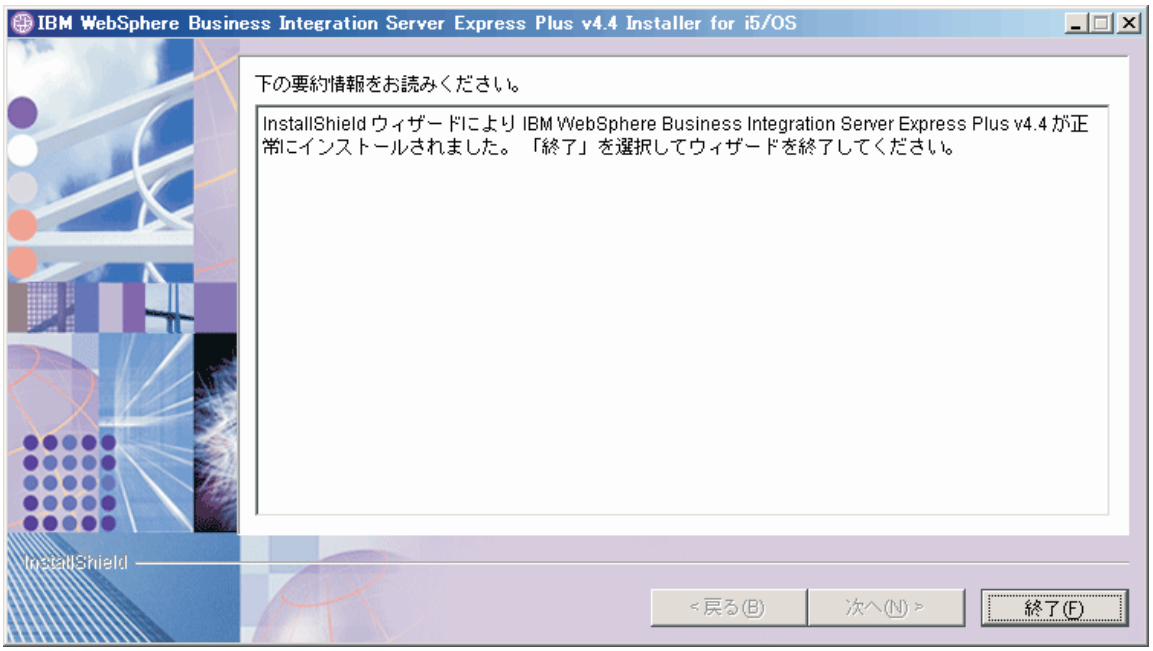


*図 9. サマリー画面の終了*

9. 「終了」ボタンをクリックします。

   **注:** 「カスタム」インストールを実行している場合、 22 ページの『「カスタム」インストールの追加ステップ』に進んでください。

   インストールが完了したことを通知し、First Steps アプリケーションを起動するかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。このアプリケーションの詳細については、 28 ページの『First Steps の使用』のセクションを参照してください。

10. Launchpad はオープンのままになります。Launchpad で「終了」ボタンをクリックして、Launchpad を閉じます。

## 「カスタム」インストール

このセクションでは、「カスタム」インストールに特有のコンポーネント選択画面について説明します。これらの画面での操作が済んだら、ステップ 3 (12 ページ) を参照して、インストール・プロセスを完了してください。

GUI 画面上の特定エントリーの隣には、ヘルプ・アイコンがあります。アイコンを選択すると、その機能や、その機能に必要な前提条件についての関連情報を示すウィンドウが開きます。

### インストール対象コンポーネントの選択

どのコンポーネントをインストールするかをシステムに伝えるには、以下のステップを実行します。

1. 「セットアップ・タイプを選択してください」画面で、「**カスタム**」ラジオ・ボタンを選択します。「サーバーのインストール」画面が表示されます。

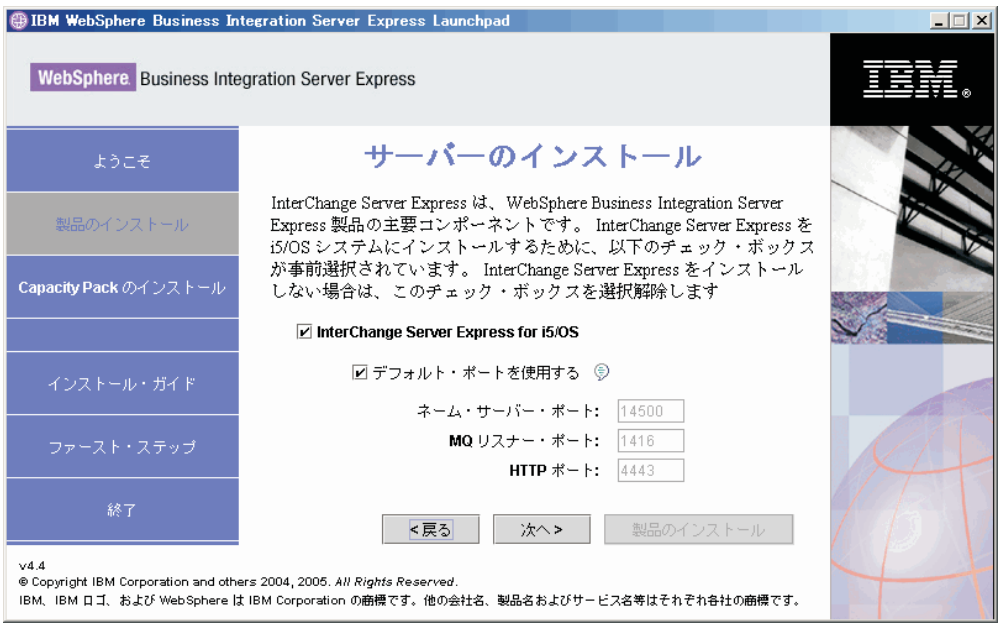


*図 10. 「サーバーのインストール」画面*

2. 「サーバーのインストール」画面で、「**InterChange Server Express**」項目の横のチェック・ボックスがデフォルトで選択されています。これを選択したまま、InterChange Server Express をインストールします。

   「**デフォルト・ポートを使用する**」チェック・ボックスも選択します。これを選択したまま、ネーム・サーバー、MQ リスナー、および HTTP 用にリストされたデフォルト・ポートを使用します。これらのポート番号は、既に別のアプリケーションで使用中の場合にのみ変更する必要があります。WebSphere Business Integration Express 4.3.1 がシステムで検出されない場合のデフォルト・ポートは、ネーム・サーバー・ポートが 14500、MQ リスナー・ポートが 1416、HTTP ポートが 4443 です。WebSphere Business Integration Express 4.3.1 が検出された場合のデフォルト・ポートは、ネーム・サーバー・ポートが 14501、MQ リスナー・ポートが 1417、HTTP ポートが 4443 です。OS/400 または i5/OS システムで `NETSTAT *CNN` コマンドを使用して、これらのポートが使用中かどうかを判別するか、またはネットワーク管理者に問い合わせます。選択項目で異なるポートを使用するには、「**デフォルト・ポートを使用する**」チェック・ボックスを選択解除して、使用するポート番号を入力します。

   「**次へ**」を選択します。「ツールのインストール」画面が表示されます。

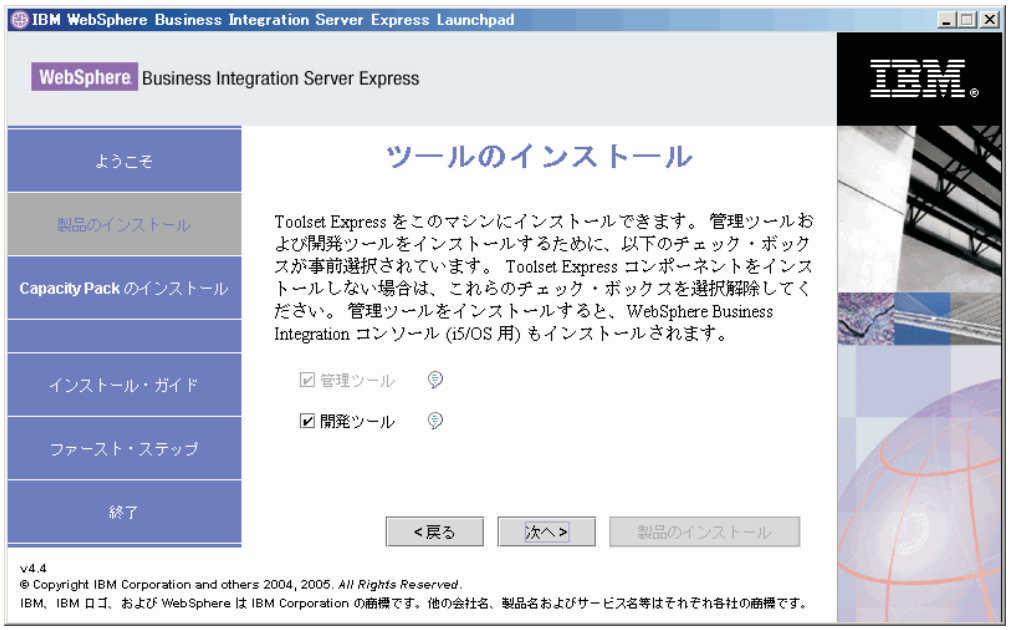


*図 11. 「ツールのインストール」画面*

3. 「ツールのインストール」画面で、「**管理ツール**」項目と「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスは、デフォルトで選択されています。ツールが Windows システムにインストールされます。以下のいずれかを実行します。
   - 管理ツールと開発ツールの*両方* をインストールするには、以下に示すように、チェック・ボックスをデフォルトで選択したままにします。
   - 管理ツールのみをインストールするには、「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択解除します。

     **注:** 開発ツールのみをインストールすることはできません。開発ツールをインストールするには、管理ツールもインストールする必要があります。
   - 管理ツールと開発ツールのどちらも インストールしない場合、「**管理ツール**」項目と「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択解除します。

     **ヒント:** 最初に、「**開発ツール**」の横にあるチェック・ボックスを選択解除します。これにより、「**管理ツール**」の横にあるチェック・ボックスが使用可能になり、チェック・ボックスを選択解除できるようになります。

   「**次へ**」を選択します。「Web ベースのツール」画面が表示されます。

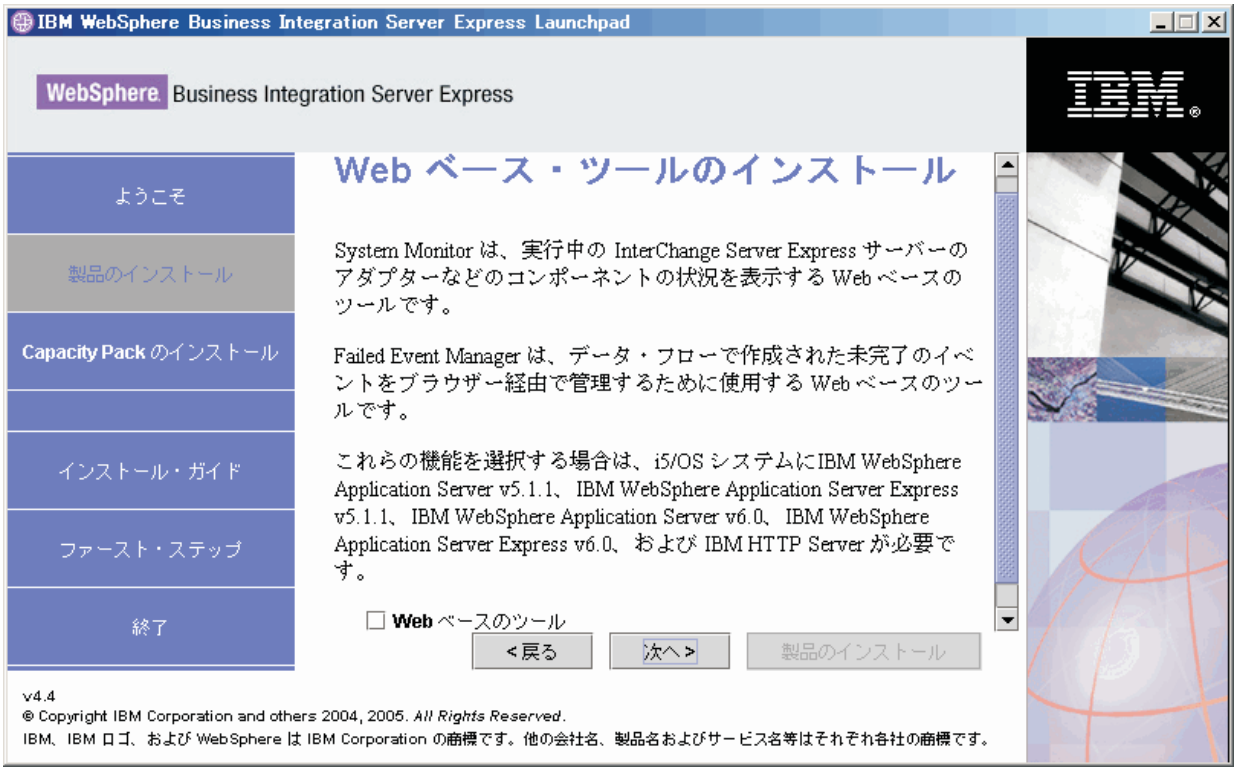


*図 12. 「Web ベース・ツールのインストール」画面*

4. 「**Web ベースのツール**」の横にあるチェック・ボックスにチェック・マークを付けて、Web ベース・ツール (System Monitor、Failed Event Manager、および Web Deployment) をインストールします。Web ベース・ツールが OS/400 または i5/OS システムにインストールされます。Web ベース・ツールでは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express のサポートされるバージョンが OS/400 または i5/OS システムにインストールされている必要があります。WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express のサポートされるバージョンがインストールされていない場合、インストール・プロセスで、後でインストールするように通知するメッセージおよびプロンプトが表示されます。Web ベース・ツールは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express とともに稼働するように構成されます。`ICSMON44` という名前のアプリケーション・サーバー・インスタンスが作成されます。

   **注:** Web ベース・ツールは、WebSphere Business Integration Server Express の初期インストールの後にインストールできます。追加の WebSphere Business Integration Server Express のインストールと同様、コンポーネントでも、Launchpad を再度実行して必要なコンポーネント (この場合は Web ベース・ツール) を選択するだけです。

   Web ベース・ツールのインストールの詳細については、23 ページの『「カスタム」インストールの追加情報』を参照してください。Web ベース・ツールが不要な場合、チェック・ボックスを空のままにして「**次へ**」を選択します。「アダプターのインストール」画面が表示されます。

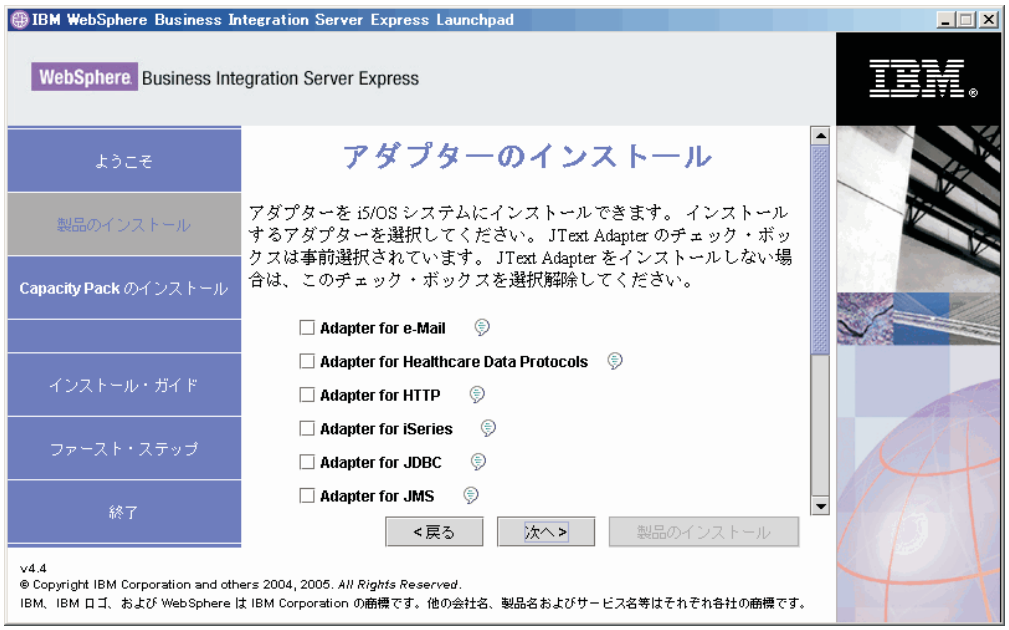


*図 13. 「アダプターのインストール」画面*

5. 「アダプターのインストール」画面で、インストールするアダプターを選択します。アダプターが OS/400 または i5/OS システムにインストールされます。Adapter for JText はデフォルトで選択されていますが、これは、Adapter for JText が、サンプル・コンポーネントの一部である System Test サンプルの実行に必要になることと、Quick Validate プロセスを完了してインストールを検査するために必要になることが理由です。Quick Validate の詳細については、第 5 章を参照してください。

   **注:** OS/400 V5R2 システムに Crypto Access Provider (5722AC3) のライセンス版がインストールされていない場合、「アダプターのインストール」画面が表示される前に、「暗号化」画面が表示されます。

   「**次へ**」を選択します。

   「サンプルのインストール」画面が表示されます。

*図 14. 「サンプルのインストール」画面*

6. 「サンプルのインストール」画面で、「**サンプル**」項目の横にあるチェック・ボックスがデフォルトで事前選択されています。システムのインストールを確認するのに使用可能な Quick Validate プロセスには、サンプルが必要です。サンプルは OS/400 または i5/OS システムにインストールされています。
   - サンプル・コンポーネントをインストールする場合は、「**次へ**」を選択します。

     **注:** サンプル・コンポーネントをインストールするには、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter のインストールが必要です。そのため、サンプル・コンポーネントのインストールを選択すると、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter は、ユーザーが前の画面でこれらのインストールを選択したかどうかにかかわらず、インストールされます。
   - サンプル・コンポーネントをインストールしない 場合は、チェック・ボックスを選択解除して、「**次へ**」を選択します。

   この時点で、インストール・プログラムによって、選択されたオプションに必要な前提条件がそろっているかどうかが検査されます。終了すると、「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。
7. 『「標準」インストール』セクションのステップ 3 (12 ページ) からステップ 9 (16 ページ) までを実行し、以下のセクション 22 ページの『「カスタム」インストールの追加ステップ』の追加のステップを引き続き実行します。

**注:** リモートの IBM DB2 Universal Database for iSeries を使用するよう計画している場合、 26 ページの『IBM DB2 Universal Database』 を参照してください。

## 「カスタム」インストールの追加ステップ

「カスタム」インストールでは、ステップ 9 (16 ページ) で説明したサマリー画面の後に、追加の画面が表示されます。その使用方法について以下のステップで説明します。

1. 「終了」(ステップ 9 (16 ページ) で説明) を選択したら、別のインストール・ウィザードが開始されます。以下の画面が表示されます。

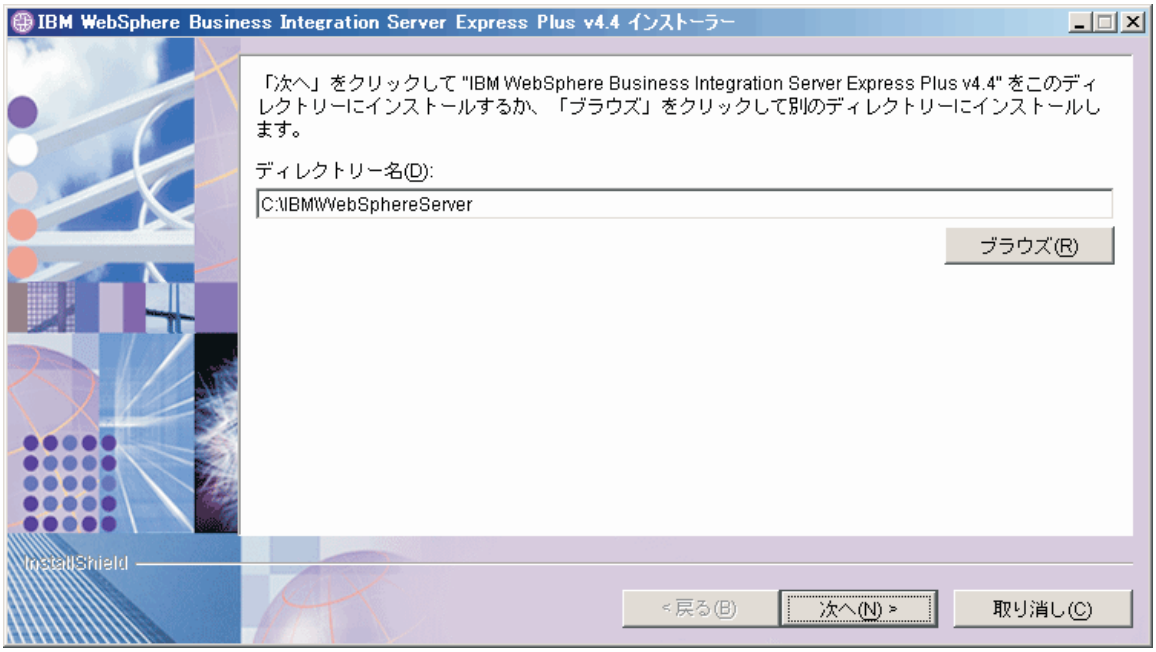


*図 15. 「Windows ディレクトリー選択 (Windows directory selection)」画面*

Windows システム上の製品コンポーネントのインストール用デフォルト・パスが表示されます。デフォルトを受け入れるか、デフォルトを変更して、「**次へ**」を選択します。「プリインストール・サマリー (Pre-installation summary)」画面が表示されます。

**注:** ディレクトリー・パスの中にスペースが入らないようにしてください。この文書の以降の説明では、インストール・ディレクトリー `C:¥IBM¥WebSphereServer` (または入力された代替パス) は *`ProductDir`* と記述します。

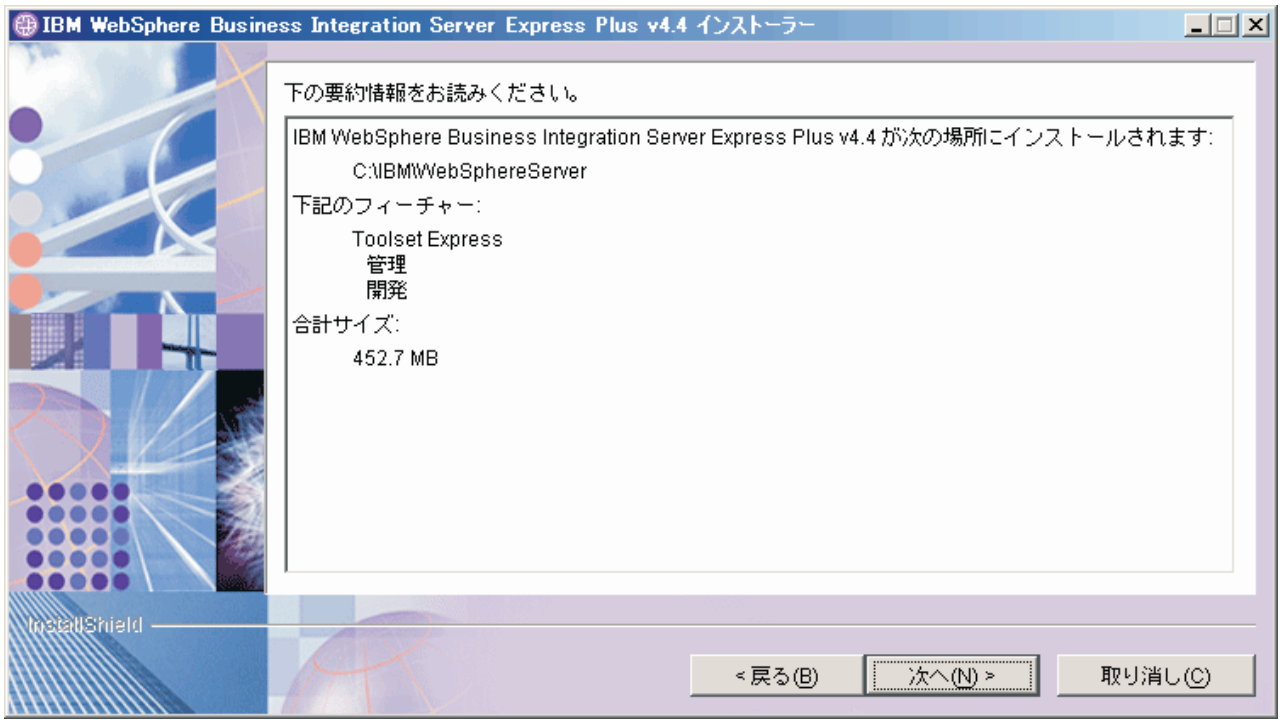


*図 16. Windows システムにインストールされているコンポーネントの「プリインストール・サマリー (Pre-installation summary)」画面*

2. 必要なすべてのコンポーネントが Windows システムにインストールされていることを確認し、インストールされていたら、「**次へ**」を選択してインストールを開始します。進行状況表示バーが表示されます。
3. インストールが完了すると、最終画面が表示されます。「完了」ボタンをクリックします。インストールが完了したことを通知し、First Steps アプリケーションを起動するかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。このアプリケーションの詳細については、 28 ページの『First Steps の使用』のセクションを参照してください。
4. Launchpad はオープンのままになります。Launchpad で「終了」ボタンをクリックして、Launchpad を閉じます。

## 「カスタム」インストールの追加情報

「カスタム」のインストール・プロセス時に Web ベース・ツールのインストールを選択した場合、Web ベース・ツールのポート番号を構成する必要があります。OS/400 または i5/OS システムにインストールされたコンポーネントのインストール・ウィザードの操作中に、「ご使用条件 (License Agreement)」画面の後と「RBAC 情報」画面の前に以下の画面が表示されます。

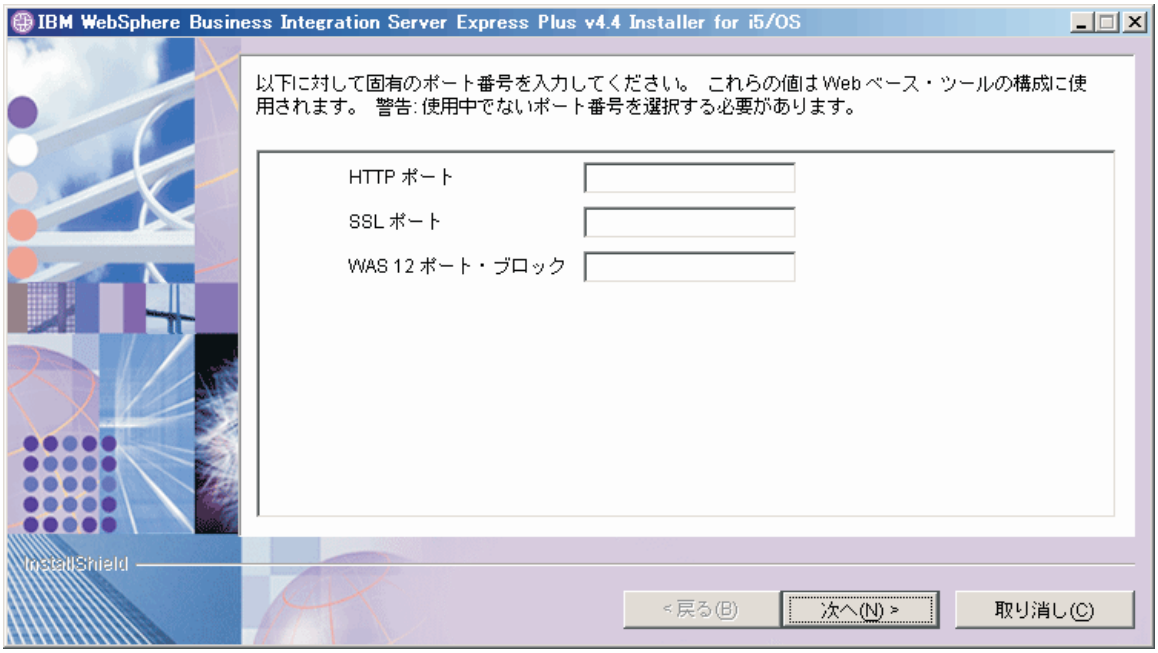


*図 17. 「Web ベース・ツール・ポートの構成 (web-based tools port configuration)」画面*

この画面では、使用するポート番号を入力します。以下のポート番号を定義します。

- HTTP ポート: アプリケーションで使用される HTTP ポート。以下に説明する URL でこのポート番号を使用して、Web ベース・ツールにアクセスします。
- SSL ポート: SSL 通信の HTTP に使用されます。
- WAS 12 ポート・ブロック: WebSphere Application Server で使用する 12 の連続したポートの範囲のうち最初に使用される番号を入力します。

OS/400 または i5/OS システムで `NETSTAT *CNN` コマンドを使用して、使用可能なポートを判別するか、またはネットワーク管理者に問い合わせます。

クライアント・システム上の Web ブラウザーに以下の構文で URL を入力すると、Web ツールにアクセスできます。

- System Monitor および Failed Event Manager:

  `http://`*`hostname`*`:`*`HTTPportnum`*`/ICSMonitor`

- Web Deployment:

  `http://`*`hostname`*`:`*`HTTPportnum`*`/WebDeployment`

ここで、*`hostname`* は OS/400 または i5/OS システムの名前で、*`portnum`* はこの画面に表示される HTTP ポート番号です。

## ソフトウェア前提条件

「標準」インストールの場合、以下のコンポーネントは事前に指定されています。「カスタム」インストールの場合、必要なソフトウェア前提条件は、インストールするコンポーネントに基づきます。Launchpad によって、一部またはすべての前提条件ソフトウェアがシステムにインストールされているかどうかが判別され、その分析結果が「ソフトウェア前提条件」画面に送られます。

ご使用の OS/400 または i5/OS システムに OS/400 または i5/OS ライセンス・プログラム前提条件をインストールするように指示されます。Launchpad によって自動的にインストールできるのは、WebSphere MQ および OS/400 および i5/OS 向けの WebSphere Application Server Express ライセンス・プログラムのみです。その他のライセンス・プログラムの CD は、OS/400 または i5/OS オペレーティング・システム CD とともに出荷されます。これらのライセンス・プログラムのインストール手順を使用して、その他のライセンス・プログラムを OS/400 または i5/OS にインストールする必要があります。

表 1 に、前提条件ソフトウェアを示します。画面に表示される表に含まれる項目がすべてになるか一部になるかは、選択したインストール・オプションに応じて異なります。

*表 1. 考えられる前提条件ソフトウェア*

| 前提条件ソフトウェア | 説明 |
| --- | --- |
| Java Development Kit 1.4.2 (Windows システム) | コラボレーション開発およびマッピング開発に必要です。 |
| Windows システムでは、WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD07 以降の CSD。OS/400 または i5/OS システムでは、MQ 5.3.0.2 CSD09 以降の CSD。 | WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストールごとに必要です。 |
| IBM DB2 Universal Database for iSeries | InterChange Server のリポジトリーで必要です。OS/400 または i5/OS オペレーティング・システムで提供されます。 |
| OS/400 または i5/OS システムでは、WebSphere Application Server 5.1.1 か 6.0、または WebSphere Application Server Express 5.1.1 か 6.0。 | System Monitor、Failed Event Manager、Web Deployment のいずれかをインストールする予定の場合に必要です。詳細については、第 8 章を参照してください。 |
| Web ブラウザー (Windows システム) | System Monitor、Failed Event Manager、Web Deployment のいずれかを使用する予定の場合に必要です。 |
| IBM Toolbox for Java | すべてのコンポーネントで必要です。OS/400 または i5/OS で提供されます。 |
| AC3 Crypto Access Provider (5722AC3) | アダプターに必要です。OS/400 または i5/OS で提供されます。 |
| QShell Interpreter | OS/400 または i5/OS システムでコマンドを入力するのに必要です。OS/400 または i5/OS で提供されます。 |
| IBM HTTP Server for OS/400 または IBM HTTP Server for i5/OS | Web ベース・ツールで必要です。OS/400 または i5/OS で提供されます。 |

**注:** IBM Toolbox for Java、AC3 Crypto Access Provider (5722AC3)、QShell Interpreter、および IBM HTTP Server for OS/400 は、OS/400 または i5/OS システムに付属の CD で提供される OS/400 ライセンス・プログラム製品です。OS/400 または i5/OS システムにこれらのプログラムがインストールされていない場合は、Launchpad により、これらの CD を探してインストールするよう要求されます。

事前に適切なデータベース・バージョンがインストールされている場合、『IBM DB2 Universal Database』 セクションに示すように、データベースが正しく構成されていることを確認してください。

このシステムに前提条件ソフトウェアの旧バージョンが既にインストールされている場合、Launchpad の動作の詳細と、バージョンに応じた必要な処理の詳細については、 56 ページの『ソフトウェア前提条件のアップグレード』を参照してください。

前提条件のいずれかが損傷している場合は、Launchpad にエラー状況が表示されます。

## データベースのインストールおよび構成

このセクションでは、データベースをインストールまたは構成するときに必要な場合がある追加情報を示します。

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus 4.4 for OS/400 and i5/OS では、OS/400 V5R2 または i5/OS V5R3 オペレーティング・システムで提供される IBM DB2 Universal Database (UDB) for iSeries との併用が保証されています。

### IBM DB2 Universal Database

以下の情報は、IBM DB2 Universal Database for iSeries に関連するものです。

**データベースの最小要件:** データベースは以下のように構成する必要があります。

- データベースおよび表作成特権を持つ WebSphere Business Integration Server Express 管理者ユーザーまたは Express Plus 管理者ユーザーが作成されている。
- データ・ファイルのディスク・スペースとして 50 MB が InterChange Server Express リポジトリー・データベースに使用できる。

**Launchpad を使用したデータベースのインストール:** 以下の情報は、Launchpad を使用してデータベースをインストールするときに役立ちます。WebSphere Business Integration Express は、ローカルまたはリモートの OS/400 または i5/OS システム上にある IBM DB2 Universal Database をサポートします。このデータベースはオペレーティング・システムで提供されます。「ソフトウェア前提条件」画面から「**データベース**」を選択すると、追加の選択項目が表示され、リモート・データベースかローカル・データベースのどちらかを指定できます。

**注:** リモート・データベースを使用している場合、Launchpad からデフォルト・インスタンスをインストールする前に、リモート・システム上に `QWBIDFT44` という名前のコレクションを作成する必要があります。このコレクションは、デフォルト・インスタンスのリポジトリーとして使用されます。Launchpad によって、Launchpad のリモート構成セクションに指定したユーザー ID とパスワードを使用してリモート `QWBIDFT44` データベースに接続できることが検査されます。リモート・コレクションにアクセスできないか、またはアクセスがエラーになる場合、エラー・メッセージを受け取ります。また、オプションで Launchpad から入力した情報を変更することもできます。このリモート・コレクションは、検査された後、インストール・プロセス時に InterChange Server Express リポジトリーとして使用されます。InterChange Server Express はこのリモート・

データベースを使用するように構成されます。
使用されるデータベースが前に指定した OS/400 または i5/OS システム上にある場合、「**ローカル・データベースを使用**」を選択します。ローカル・データベースを使用する場合、ローカル・システムに `QWBIDFT44` という名前のコレクションが作成されます。データベースが異なる OS/400 または i5/OS システムにある場合、「**リモート・データベースを使用**」を選択してから「**継続**」を選択します。追加のシステムのホスト名、ユーザー名、およびパスワードを入力して、「**継続**」を選択します。

### Web ブラウザーのインストール

Toolset Express のコンポーネントである System Monitor、Failed Event Manager、および Web Deployment をインストールする場合、Windows クライアント上に Web ブラウザーが必要です。Launchpad は、サポートされている Web ブラウザーを自動的にインストールすることはできませんが、サポートされているバージョンを検索する手順を示します。

サポートされている Web ブラウザーをインストールしていない状態で、そのインストール手順を表示する場合は、Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、「**Web ブラウザー**」の項目を展開します。この画面には、サポートされているブラウザーの入手先 Web サイトが表示されます。

## インストールの結果

インストール・プロセスでは、以下の処理が完了しました。

- 製品コンポーネントがインストールされた。
- OS/400 または i5/OS システム上に `QWBIDFT44` という名前の InterChange Server Express のデフォルト・インスタンスが作成された (InterChange Server Express またはサンプルのインストールを選択している場合)。
- Toolset Express がインストールされている場合、Toolset Express が使用する `Cwtools.cfg` ファイルが (Windows システム上に) 構成された。
- InterChange Server Express が使用する `InterchangeSystem.cfg` ファイルが構成された。
- WebSphere MQ のキュー・マネージャーが構成された。
- OS/400 または i5/OS 上で、InterChange Server Express が TCP/IP 自動始動サービスによって自動的に始動するように構成された。
- プラットフォーム固有の構成および登録が提供された。
- サンプルがインストールされている場合、`/Samples` ディレクトリーに JText アダプターのインスタンスが構成された。
- InterChange Server Express または Express Plus サーバーにコンテンツが配置された。

インストール・プロセス時に、インストールされるコンポーネントおよび実行される他のアクションについて詳述するログ・ファイルが作成されます。OS/400 および i5/OS では、`install.log` ファイルはディレクトリー `/QIBM/ProdData/WBIServer44/` にあります。

Windows では、ツールをインストールする場合 (「カスタム」インストールのみ)、`wbi_server_exp_install_log.txt` というログ・ファイルが作成され、ディレクトリー *ProductDir*¥log¥ に配置されます。

この時点で、31 ページの『ディレクトリー構造およびファイル』に示すシステムのファイルおよびディレクトリー構造を見ることができます。

## First Steps の使用

First Steps アプリケーションは、単一のインターフェースで、これを使用して WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を使用および管理します。このアプリケーションは、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus がインストールされている場合、Windows インストーラーによってインストールされます。

First Steps は、Launchpad か、Windows の「スタート」メニューから起動できます。First Steps を起動した時点で WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus がインストールされていなかった場合、First Steps の大半の機能は使用不可になり、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus 製品を先にインストールするよう指示されます。

このセクションでは、このアプリケーションの使用とその各種コンポーネントの詳細に関する情報を示します。

### プラットフォーム (メニュー・バー)

プラットフォーム・メニュー項目を使用すると、OS/400 または i5/OS システムと Windows システム上のさまざまなコンポーネントをそれぞれ管理およびアクセスするために、First Steps の OS/400 または i5/OS バージョンと Windows バージョンを切り替えることができます。First Steps では、前回選択されていたプラットフォームが、次回の起動時に記憶されています。

### ようこそ

「ようこそ」画面は、First Steps が起動すると、デフォルトで開きます。この画面には、次回コンピューターがリブートしたときに First Steps を起動するかどうかを指定するためのチェック・ボックスがあります。このチェック・ボックスは、デフォルトで選択されています。このチェック・ボックスを選択したままにしておくと、First Steps は、始動時の Windows プログラム・マネージャー・メニューにショートカットを追加します。チェック・ボックスを選択解除すると、ショートカットが既に存在する場合はショートカットが削除され、アプリケーションを初めて開く場合、ショートカットは組み込まれません。First Steps が CD から起動され、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus がまだマシンにインストールされていない場合、このチェック・ボックスは使用不可になります。

*図 18. First Steps の「ようこそ」画面*

## Quick Validate

これをクリックすると、インストールが正常に完了したことの検証方法を説明する Quick Validate オンライン・ヘルプが表示されます。

## サーバーの始動または停止

これをクリックして、InterChange Server Express の QWBIDFT44 インスタンスを停止または開始します。サーバーを始動中の場合は、OS/400 または i5/OS システム・ログインのプロンプトが表示されます。

## 管理ツール

これをクリックすると、「管理ツール」画面が開きます。

*図 19. 「First Steps 管理ツール (First Steps Administrative Tools)」画面*

この画面には、使用可能な管理ツールのリストと、各ツールの簡単な説明が表示されます。

これらのツールがインストールされていない場合、パネルには、管理ツールがインストールされていないことと、Launchpad を使用して管理ツールをインストールするよう求める記述が表示されます。

## 開発ツール

これをクリックすると、「開発ツール」画面が開きます。この画面には、使用可能な開発ツールのリストと、各ツールの簡単な説明が表示されます。

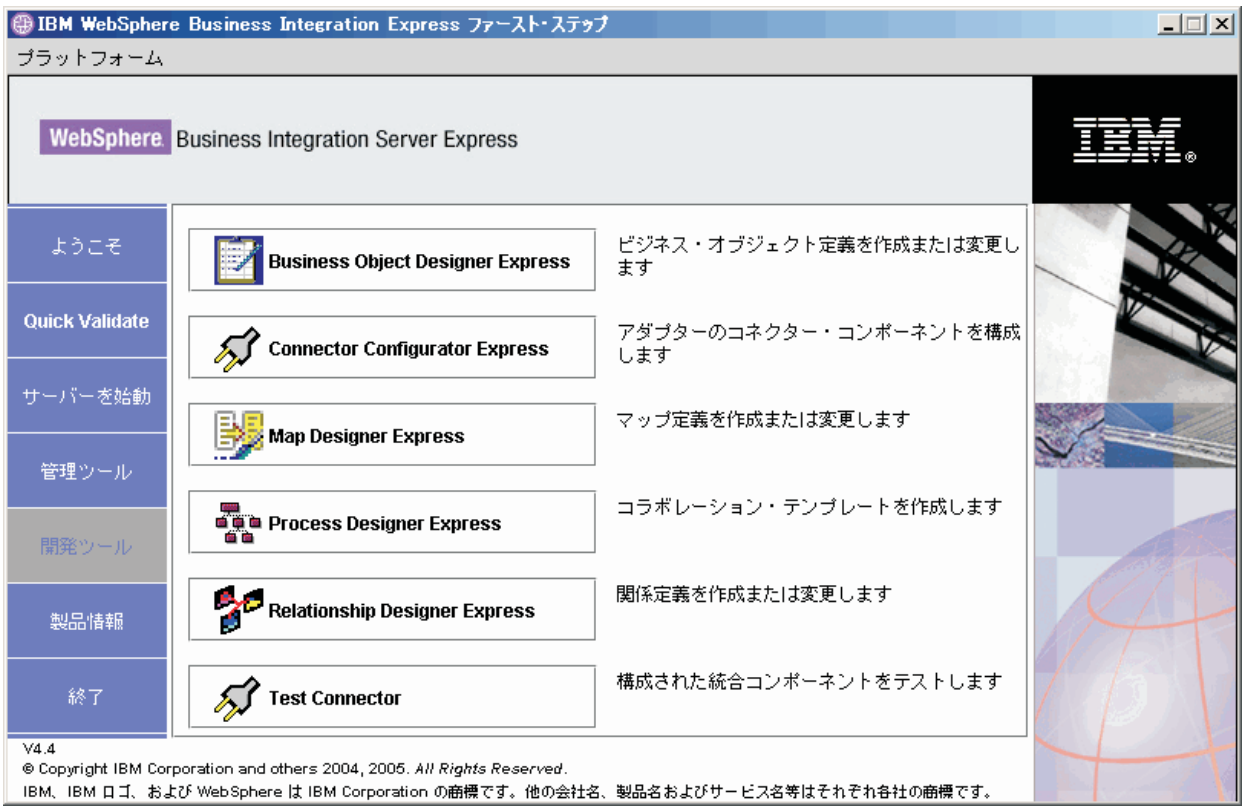


*図 20. 「First Steps 開発ツール (First Steps Development Tools)」画面*

### 製品情報

これをクリックすると、Web ブラウザーが起動し、WebSphere Business Integration Information Center の URL に移動します。

### 終了

これをクリックすると、First Steps が終了します。

## ディレクトリー構造およびファイル

以下のセクションでは、OS/400 または i5/OS システムおよび Windows システムにインストールされるディレクトリーについて説明します。

### OS/400 および i5/OS システム

OS/400 または i5/OS システムでは、次のオブジェクト、ディレクトリー、およびファイルが作成されます。

1. `QWBISVR44` ユーザー・プロファイル
2. `QWBISVR44` ライブラリー。ここには、製品のオブジェクトが格納されます。
3. `QWBIDFT44` ライブラリー。これは、Interchange Server Express のデータベース・リポジトリーです。

4. 次のディレクトリー内にある統合ファイル・システムのディレクトリーおよびファイル
   - /QIBM/ProdData/WBIServer44
   - /QIBM/UserData/WBIServer44

## Windows システム

Windows システムでは、デフォルトで次のディレクトリーが C:¥IBM¥WebSphereServer ディレクトリー (本書では *ProductDir* と記述します) の下に作成されます。

**注:** *ProductDir* に表示されるファイルおよびディレクトリーは、インストール時に選択したコンポーネントと使用中の Windows プラットフォームによって決まります。ご使用の環境にあるファイルおよびディレクトリーは、以下にリストするファイルおよびディレクトリーとは異なります。

*表 2. Windows システムにおける WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus コンポーネントのディレクトリー構造*

| ディレクトリー名 | 内容 |
|---|---|
| • _uninstWBIServerExp44 (WebSphere Business Integration Server Express インストール環境)<br>• _uninstWBIServerExpPlus44 (WebSphere Business Integration Server Express Plus インストール環境) | Java 仮想マシン (JVM)、および WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を削除するときに使用する uninstaller.exe ファイルが格納されています。 |
| _uninstZip | インストール時に unzip されるすべてのファイルのリストが格納されています。 |
| bin | グローバル環境のスクリプトが格納されています。 |
| コンソール | OS/400 または i5/OS コンソール・ツールの実行および構成に必要なファイルが格納されています。 |
| DataHandlers | システムが使用するデータ・ハンドラーの .jar ファイルが格納されています。 |
| DevelopmentKits | 開発者がさまざまなシステム・コンポーネントを作成する際に役立つサンプル・ファイルが格納されています。提供サンプルには、Server Access for EJB、Server Access for J2EE Connector Architecture、コネクター (C++ および Java)、Object Discovery Agents などがあります。 |
| DLMs | Dynamic Loadable Module (DLM)、および InterChange Server Express マップのその他のファイルが格納されたサブディレクトリーが格納されています。 |
| FirstSteps | First Steps および Quick Validate のファイルが格納されています。 |
| jre | IBM JRE ファイルが格納されています。 |
| legal | ライセンス・ファイルが格納されています。 |
| lib | システムの .jar ファイルが格納されています。 |

*表 2. Windows システムにおける WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus コンポーネントのディレクトリー構造 (続き)*

| ディレクトリー名 | 内容 |
|---|---|
| log | インストールまたはアンインストール中に発生したすべてのエラーおよび警告が含まれるログ・ファイルが格納されています。ファイル名は wbi_server_exp_install_log.txt です。 |
| messages | 生成されたメッセージ・ファイルが格納されています。 |
| ODA | 各エージェントの Object Discovery Agent .jar ファイルおよび .bat ファイルが格納されています。 |
| plugins | Toolset Express で必要な Eclipse プラグイン・ファイルが格納されています。 |
| repository | システム・コンポーネントの定義が格納されています。 |
| Samples | ベンチマーク・サンプル用のコンポーネント定義、およびコラボレーション用のサンプル・メール・ファイルが格納されています。 |
| templates | start_connName.bat ファイルが格納されています。 |
| Tools | インストール時に選択された場合の Workbench ファイルが格納されています。Tools¥ies301 には、WebSphere Studio Workbench が格納されています。Tools¥eclipse¥plugins には、System Manager プラグインが格納されています。 |
| WBFEM | Failed Event Manager ファイルが格納されています。 |
| wbiart | アダプター・ランタイムに関連するファイルが格納されています。 |
| WBSM | System Monitor ファイルが格納されています。 |
| WBWD | Web Deployment ファイルが格納されています。 |

## 初期インストール後の追加コンポーネントのインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールした後に、追加コンポーネントをインストールすることができます。これを行うには、Launchpad の左側のパネルから「**製品のインストール**」ボタンを選択します。これにより Launchpad には、インストールするコンポーネントを選択する画面が表示されます (詳細については、 16 ページの『「カスタム」インストール』を参照)。特定の画面から一部のコンポーネントを既にインストールした場合、画面は表示されますが、既にインストールされたコンポーネントの横のチェック・ボックスは使用不可になります。例外は OS/400 システム上の「暗号化」画面で、5722AC3 が既にインストールされている場合は表示されません。

Launchpad は、新規 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus コンポーネントのインストールと同様に、追加ソフトウェア前提条件が必要かどうかを新規の選択内容に基づいて決定し、そのインストールをガイドします。

## WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール

これらの手順に従って、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を削除します。OS/400 または i5/OS システムにアクセスして削除する必要があるコンポーネントもあれば、Windows システムから削除する必要があるコンポーネントもあります。アンインストーラー・プログラムは、前提条件ソフトウェアをアンインストールしません。前提条件ソフトウェアの削除は、特定の前提条件ソフトウェアに用意されている説明に従って、手動で行う必要があります。

これらの手順は、手動のアンインストール・プロセスを示しています。「サイレント」のアンインストール・プロセスについては、69 ページの『サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストール』を参照してください。

**注:** アンインストールする前に、OS/400 または i5/OS システムと Windows システムの両方で (該当する場合)、InterChange Server Express に関連するプロセスが動作していないことを確認してください。プロセスが動作している場合は、それを停止します。

### サーバー・インスタンスの削除

InterChange Server コンポーネントをアンインストールするには、その前にすべての InterChange Server インスタンスを削除する必要があります。

サーバー・インスタンスを削除するには、まず Adapter Capacity Pack と Collaboration Capacity Pack をアンインストールする (インストールされている場合) ことをお勧めします。Adapter Capacity Pack をアンインストールには 45 ページの『Adapter Capacity Pack のアンインストール』を、Collaboration Capacity Pack をアンインストールするには 50 ページの『Collaboration Capacity Pack のアンインストール』をそれぞれ参照してください。

キャパシティー・パックのアンインストールが完了したら、QShell からコマンド `/QIBM/ProdData/WBIServer44/bin/delete_instance.sh` *`instanceName`* を実行します。

### MQ キュー・マネージャーおよびリスナーの削除

サーバー・インスタンスの削除時には、キュー・マネージャーおよびリスナーは削除されません。 IBM では、他のアプリケーションで使用されていない場合には、それらを削除することをお勧めします。キュー・マネージャーおよびリスナーを削除するには、OS/400 または i5/OS システムから以下のステップを実行します。これらは CL コマンドです。

1. `WRKMQM` と入力して Enter キーを押します。
2. キュー・マネージャーの隣にある「**15**」を入力して、キュー・マネージャーを終了します。
3. F5 を押して、状況を最新表示します。状況が「INACTIVE」の場合、処理を続けます。
4. `WRKMQMLSR` と入力します。
5. キュー・マネージャーに関連するリスナーの隣にある「**4**」を入力します。

6. `WRKMQM` と入力します。
7. キュー・マネージャーの隣にある「4」を入力して、キュー・マネージャーを削除します。

## OS/400 または i5/OS システムからのコンポーネントの削除

IBM では、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール環境全体を削除するか、または削除する特定のコンポーネントを選択できるコンソール・モードのプログラムを OS/400 および i5/OS に提供しています。アンインストール・プログラムを実行するには、OS/400 または i5/OS システムにログオンし、次の手順を行います。

1. コマンド行で `QSH` と入力して、QShell を呼び出します。
2. アンインストール・ディレクトリーを変更します。
   **Server Express の場合:** `cd /QIBM/ProdData/WBIServer44/product/_uninstWBIServerExp`
   **Server Express Plus の場合:** `cd /QIBM/ProdData/WBIServer44/product/_uninstWBIServerExpPlus`
3. コマンド `java -jar uninstall.jar` を入力して、アンインストール・プログラムを始動します。「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」というテキストが表示されます。
4. **1** を入力して次へ進むか、**Enter** キーを押してデフォルトのナビゲーションを選択します。「フィーチャーのアンインストール (Uninstallation Feature)」というテキストが表示されます。インストールされている各コンポーネントは、横に **x** が付いた状態で表示され、アンインストールの対象として選択されています。
5. 削除の対象にするコンポーネントは選択されたままの状態にして、**Enter** キーを押し、次に進みます。「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」というテキストが表示されます。
6. **Enter** キーを押して選択内容を確定します。選択されたコンポーネントがアンインストーラーによって削除されます。「ポストアンインストールの終了 (Post-uninstallation Finish)」というテキストが表示されます。
7. 「**完了**」を押して、アンインストール・プログラムを終了します。

## Windows システムからのツールの削除

ツールを Windows システムからアンインストールするには、以下のようにアンインストール GUI を実行します。

1. 「**スタート**」 > 「**設定**」 > 「**コントロール パネル**」を選択します。
2. 「**アプリケーションの追加と削除**」をダブルクリックします。
3. スクロールダウンして、(インストールされている製品により)「**IBM WebSphere Business Integration Server Express v4.4**」または「**IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus v4.4**」を選択し、「**変更と削除**」ボタンを選択します。

   **注:** 「**アプリケーションの追加と削除**」ツールには、アンインストール後に解放されるディスク・スペースの推定値が表示されますが、複数の製品が同じフォルダーにインストールされている場合は正確でない可能性があります。

   「アンインストールへようこそ (uninstallation welcome)」画面が表示されます。

4. 「アンインストールへようこそ (uninstallation welcome)」画面で、「**次へ**」を選択します。

   「アンインストールの機能 (uninstallation features)」画面が表示されます。インストール済みのコンポーネントの横にはチェックマークが付いています。
5. 「アンインストールの機能 (uninstallation features)」画面で、削除するコンポーネントを選択したまま 「**次へ**」を選択します。

   「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」画面が表示されます。
6. 「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」画面で「**次へ**」を選択し、選択項目を確認します。選択されたコンポーネントがアンインストーラーによって削除されます。

   「ポストアンインストールの終了 (post-uninstallation finish)」画面が表示されます。
7. 「ポストアンインストールの終了 (post-uninstallation finish)」画面で、「**完了**」を選択してアンインストール GUI を終了します。

**注:** `C:¥IBM¥WebSphereServer` ディレクトリーは、場合によっては手動で削除する必要があります。

サイレント・アンインストールも使用できます。サイレント・アンインストールの実行手順については、 69 ページの『サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストール』を参照してください。

## 次のステップに進む

ソフトウェア前提条件や WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を正常にインストールしたら、 37 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの初回の始動』に進みます。

第 4 章、 41 ページの『第 5 章 インストールの検証』の順に指示に従うと、WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールする予定の場合でも、基本システムが正しくインストールされ、正常に動作するかを、追加コンポーネントのインストール前に検証します。

# 第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの初回の始動

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストーラーは、製品のインストール・タスクおよび構成タスクの大半を実行します。したがって、これらの製品をそのインストーラーを使用してインストールした場合、以下のタスクは既に実行されています。

- スクリプト・ファイルおよび構成ファイルは正常に構成されている。
- コンポーネントは、OS/400 および i5/OS のサブシステムで動作するよう、さらに OS/400 および i5/OS 上の TCP/IP サーバーと連動して自動的に始動するようセットアップされている。
- 内容はリポジトリーに配置されている。

システムを始動するには、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントおよび System Manager コンポーネントを起動し、InterChange Server Express を System Manager に登録する必要があります。

**注:** この章で説明されているタスクは、First Steps アプリケーションか、または Windows の「スタート」メニューから実行できます。この章では、Windows の「スタート」メニューからさまざまなコンポーネントを開始する方法について説明します。First Steps から開始しても構いません。「First Steps」画面から、「**プラットフォーム**」>「**OS/400**」を選択します。これにより、正しいメニュー項目と画面が、OS/400 または i5/OS インストール環境に表示されます。

さらに、この章ではコンソールがインストールされていることが想定されています。インストールされていない場合、代わりの説明が表示されます。

この章の内容は以下のとおりです。


- 『WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動』
- 38 ページの『InterChange Server Express のセットアップ』
- 40 ページの『次のステップに進む』


## WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を始動するには、以下の手順に従います。

1. 「**スタート**」>「**プログラム**」>「**IBM WebSphere Business Integration Express**」>「**Toolset Express**」>「**管理ツール**」>「**コンソール**」と選択して、コンソールを開始します。
2. OS/400 または i5/OS の「サインイン (Sign-in)」画面で、**OS/400 または i5/OS システム名または IP アドレスと、ユーザー・プロファイルおよびパスワードを**

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

**入力します。** ユーザー・プロファイルには、`*JOBCTL` 特殊権限が必要です。「コンソール」画面からサーバーを始動します。

コンソールがインストールされていない場合は、OS/400 および i5/OS コマンドの項目で、CL コマンド `STRSBS QWBISVR44/QWBISVR44` を実行します。

サブシステムが既にアクティブになっているというメッセージが表示されたら、次の手順を行います。

a. CL コマンド `QSH` を実行します。

b. QShell で、次のスクリプトを実行します。

```
/QIBM/ProdData/WBIServer44/bin/submit_ics_server.sh QWBIDFT44
```

## InterChange Server Express のセットアップ

InterChange Server Express を使用するには、System Manager を使用して InterChange Server Express の登録および接続を行う必要があります。以下のセクションでは、これらのタスクを実行する方法について説明します。

- 『System Manager の始動』
- 『InterChange Server Express を System Manager に登録する』
- 39 ページの『InterChange Server Express への接続』
- 39 ページの『InterChange Server Express のパスワードの変更』

### System Manager の始動

System Manager は、InterChange Server Express およびリポジトリーとの GUI です。

System Manager を開始するには、「**スタート**」>「**プログラム**」>「**IBM WebSphere Business Integration Express**」>「**Toolset Express**」>「**管理ツール**」>「**System Manager**」と選択します。

### InterChange Server Express を System Manager に登録する

System Manager は、InterChange Server Express のインスタンスを 1 つ管理できます。使用環境のインスタンスは System Manager に登録する必要があります。サーバーを登録すると、その名前は、サーバーが削除されない限り常に System Manager に表示されます。デフォルトのインストール済みサーバー名は `QWBIDFT44` です。

InterChange Server Express インスタンスを登録するには、以下のステップに従います。

1. System Manager で、左ペインの「**InterChange Server インスタンス**」を右マウス・ボタンでクリックして、「**サーバーを登録**」を選択します。
2. 「**新規サーバーを登録**」ダイアログ・ボックスで、InterChange Server Express の名前をブラウズするか、入力します。

   **注:** 統合テスト環境でサーバーを使用する予定の場合は、「**テスト・サーバー**」チェック・ボックスを選択します。統合テスト環境は、テスト・サーバーとして登録されているサーバーとのみ通信します。

3. ユーザー名とパスワードを入力して、「**ユーザー ID およびパスワードを保管**」チェック・ボックスを選択します。これは、インストール時に構成した RBAC (役割ベースのアクセス制御) で構成されたパスワードと同一です。
4. 「**OK**」を選択します。

サーバー名が System Manager ウィンドウの左側に表示されます。表示されない場合は、「InterChange Server インスタンス」フォルダーを展開してください。

## InterChange Server Express への接続

登録された InterChange Server Express が稼働していることを、接続によって検証します。System Manager を使用して InterChange Server Express に接続するには、以下の手順を実行します。

1. System Manager で、左側ペインの InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、「**接続**」を選択します。
2. 「サーバー・ユーザー ID およびパスワード」確認画面で「**OK**」を選択します。

## InterChange Server Express のパスワードの変更

InterChange Server Express は、インストール時に構成した「RBAC」(Role-Based Access Control) 画面で構成されたパスワードによって保護されています。ただし、セキュリティーのためにパスワードを後で変更する場合は、システムのセットアップ後に行います。

InterChange Server Express のパスワードを変更するには、以下のステップに従います。

1. System Manager で、左ペインの InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、「**パスワードの変更**」を選択します。
2. 旧パスワード、新規パスワードの順に入力し、確認のために新規パスワードを再入力して、「**OK**」を選択します。
3. パスワードの変更を有効にするには、InterChange Server Express をシャットダウンして再始動する必要があります。その手順は以下のとおりです。
   a. System Manager で、稼働している InterChange Server Express を右マウス・ボタンでクリックし、「**シャットダウン**」を選択します。
   b. 「サーバーをシャットダウン」ダイアログ・ボックスで、現在の作業が完了してから正常にサーバーをシャットダウンするか、クリーンアップを実行せずにただちにサーバーをシャットダウンします。

      「**正常**」を選択して、「**OK**」を選択します。

      待たずにサーバーをシャットダウンする必要がある場合のみ、「**即時に**」を選択してください。
   c. コンソールを始動して InterChange Server Express を再始動し、コンソールを使用してサーバーを始動します。手順については、37 ページの『WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動』を参照してください。

d. InterChange Server Express に接続します。System Manager で InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、そのパスワードを入力します。

## 次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールは完了しました。以下のいずれかを実行します。

- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールした場合に、インストールが正しく行われ、正常に動作することを検証するには、41 ページの『第 5 章 インストールの検証』に進みます。
- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールしなかった場合、および WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境にオプションの Adapter Capacity Pack や Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がない場合は、インストール時に選択したアダプターの構成に関する情報を得るために、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールしなかったが、オプションの Adapter Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、43 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールしなかったが、オプションの Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、47 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express V4.4 をインストール済みで、Express Plus V4.4 にアップグレードする場合は、53 ページの『第 8 章 WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus』 に記載されている情報を参照してください。

# 第 5 章 インストールの検証

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールした場合は、System Test と呼ばれるサンプルが得られます。このサンプルを使用すると、インストールしたシステムの動作を検証できます。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『Quick Validate』
- 『次のステップに進む』

## Quick Validate

システムが正常にインストールされ、稼働していることを確認するには、System Test サンプルを実行します。サンプルの実行手順は、Quick Validate オンライン・ヘルプから入手できます。First Steps で「**Quick Validate**」ボタンを選択すると、オンライン・ヘルプにアクセスできます。

**注:** 先に System Test サンプルを実行してから Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールすることをお勧めします。

サンプルを正常に実行したら、このセクションに戻り、『次のステップに進む』の内容をよく読んでください。

## 次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールは完了し、確認されました。以下のいずれかを実行します。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールのオプションの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がない場合は、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んで、インストール時に選択したアダプターの構成の詳細を参照してください。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールのオプションの Adapter Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、43 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストールのオプションの Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、47 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express V4.4 をインストール済みで、Express Plus V4.4 にアップグレードする場合は、53 ページの『第 8 章 WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus』 に記載されている情報を参照してください。

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

# 第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール

Launchpad は、Adapter Capacity Pack のインストールをガイドする GUI インストーラーを起動するための方法を示します。サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールも可能です。

この章の内容は以下のとおりです。


- 『Adapter Capacity Pack のインストール』
- 45 ページの『Adapter Capacity Pack のアンインストール』
- 46 ページの『次のステップに進む』


サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、 69 ページの『サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストール』を参照してください。

## Adapter Capacity Pack のインストール

Adapter Capacity Pack を正常にインストールするには、次に示す前提条件を満たす必要があります。

- OS/400 または i5/OS の場合、ユーザー・プロファイルに `*ALLOBJ` または `*SECADM` 特殊権限が必要です。
- WebSphere Business Integration Server Express は、アダプターのインストール先マシンと同じマシンにはインストールできません。(Adapter Capacity Pack に付属のアダプターと組み合わせて使用できるのは、既存の WebSphere Business Integration Server Express Plus インストール環境のみです。)
- アダプターを InterChange Server Express と同じ OS/400 または i5/OS システムにインストールしない場合、アダプターのインストール先と同じマシンに WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD09 がインストールされている必要があります。

Adapter Capacity Pack に付属のインストール GUI では、最大 3 つのアダプターをインストールします。この 3 つのアダプターは、 45 ページの『アダプターの選択項目とコンポーネント』のセクションに記載のリストから選択できます。インストーラーで一度にインストールされるアダプターは 1 つのみです (したがって、Adapter Capacity Pack のインストーラーは、特定のサービス・インスタンスにインストールするアダプターごとに個別に実行する必要があります)。 インストール GUI により、アダプターもサービスとして構成されます。

Launchpad を呼び出してインストール GUI を起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列から、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。2 つのボタンがある「Capacity Pack のインストール」画面が表示されます。
2. 「**Capacity Pack のインストール**」を選択して GUI を起動し、Adapter Capacity Pack をインストールします。

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

「ようこそ」画面が表示されます。

3. 「ようこそ」画面で、「**次へ**」をクリックします。

   「ソフトウェア・ライセンス情報」画面が表示されます。

4. ソフトウェア・ライセンス情報の条件を読み、「**使用条件の条項に同意します。**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

   インストーラーは、このセクションの先頭に記載されている前提条件に適合しているかどうかを検査します。適合しない条件がある場合、「**取り消し**」ボタンを選択してインストールを取り消すオプションがあります。すべての前提条件が適合していた場合は、次のようにインストールが進行します。

   - 「InterChange Server 名」パネルが表示されます。InterChange Server 名のデフォルトは QWBIDFT44 です。「次へ」をクリックしてデフォルト・インスタンスに Adapter Capacity Pack をインストールするか、「**次へ**」をクリックする前に、必要に応じてサーバー名を変更します。
   - インストーラーによってローカルの OS/400 または i5/OS システムで WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストールが検出されない場合、またはこれが最初のアダプター・インストールである場合、「InterChange Server Express の情報」画面が表示されます。この画面には、InterChange Server が稼働しているシステム名と ORB ポート番号のフィールドが含まれています。この画面のフィールドに適切なデータを入力して、「**次へ**」をクリックします (WebSphere Integration Server Express 4.3.1 のインストールがシステム上で検出された場合、デフォルトの ORB ポート番号は (使用されている場合)、14500 および 14501 です)。

5. 「フィーチャー (Feature)」画面が表示されます。「フィーチャー (Feature)」画面で、使用可能なアダプターのリストから、名前の横にあるラジオ・ボタンを選択して、アダプターを 1 つ選択し、「**次へ**」をクリックします。どのアダプターを選択するかの詳細については、45 ページの『アダプターの選択項目とコンポーネント』のセクションを参照してください。

6. 「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面が表示されます。「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面で、選択内容とインストールの場所を見直し、「**次へ**」をクリックします。

   インストーラーは、インストールに十分なディスク・スペースがあることを検査します。その後、インストールは次のように進行します。

   - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「**次へ**」ボタンが使用不可になります。この場合は、「**戻る**」を選択して、指定のドライブ上のスペースをある程度解放する必要があります。
   - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示され、プロセスが正常に実行されたか、または問題が検出されたことが示されます。

7. 「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面で、「**終了 (Finish)**」を選択して、インストール GUI を終了します。

インストール・プロセス時に、Adapter Capacity Pack インストーラーは、`/QIBM/ProdData/WBIServer44/AdapterCapacityPack/install.log` というインストール・ログ・ファイルを作成します。

### アダプターの選択項目とコンポーネント

Adapter Capacity Pack インストーラーを実行すると、次の中からアダプターのコンポーネントを 1 つ選択できます。

- Adapter for JD Edwards OneWorld
- Adapter for mySAP.com
- Adapter for Oracle Applications

**注:** 一部のアダプターには対応する Object Discovery Agents (ODA) があり、それらのアダプターが選択されると、その ODA がインストールされます。いずれのアダプターを選択した場合も、次のコンポーネントがインストールされます。

- Data Handler for EDI
- Data Handler for XML
- アダプター・フレームワーク

個々のアダプターの説明については、Web サイト `http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter` にあるアダプターの資料を参照してください。

## Adapter Capacity Pack のアンインストール

IBM では、Adapter Capacity Pack のインストールを削除するためのアンインストール・コンソール・プログラムを用意しています。

アンインストール・コンソール・インターフェースを実行するには、以下の手順を行います。

1. OS/400 または i5/OS システムのコマンド行で、`QSH` と入力して、対話式の QShell セッションを開始します。
2. 次のコマンドを入力して、Enter キーを押します。

   ```
   java -jar
   /QIBM/ProdData/WBIServer44/AdapterCapacityPack/_uninstAdapterCP/
   uninstall.jar
   ```

   しばらくすると、「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」というテキストが表示されます。
3. **1** を入力して「**次へ**」を選択するか、そのまま **Enter** キーを押して大括弧で囲まれたデフォルトのナビゲーション [1] を確定します。「フィーチャーのアンインストール (Uninstallation Feature)」というテキストが表示されます。インストール済みのコンポーネントが、横に [x] マークが付いた状態で表示されます。
4. 削除の対象にするコンポーネントは選択された状態のままにします。フィーチャーをクリアするか、またはその子を表示するには、番号を入力します。**Enter** キーを押し (または **0** を入力し)、アンインストールを継続します。次に、**Enter** キーをもう一度押して、次のステップに進みます。「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」というテキストが表示されます。

5. **Enter** キーを押して選択内容を確定します。Adapter Capacity Pack がインストールされたインスタンスが少なくとも 1 つ存在する場合、InterChange Server Express のインスタンス名の入力を求めるプロンプトが出されます。
6. InterChange Server 名を入力するか、**Enter** キーを押してデフォルトのサーバー・インスタンスである `QWBIDFT44` を受け入れます。
7. **Enter** キーを押してアンインストールを継続します。アンインストーラーによって、選択されたコンポーネントが削除されます。「ポストアンインストール・サマリー (Post-uninstallation Summary)」というテキストが表示されます。
8. **Enter** キーを押してアンインストール・プログラムを終了します。

## 次のステップに進む

Collaboration Capacity Pack のインストールを計画しているかどうかに応じて、次のいずれかを実行します。

- Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、47 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進みます。
- Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がない場合は、WebSphere Business Integration Server Express Plus およびこの Adapter Capacity Pack のインストール時に選択したアダプターの構成に関する情報を得るために、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んでください。

# 第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール

オプションの Collaboration Capacity Pack をインストールすると、WebSphere Business Integration Server Express Plus サーバーでコラボレーション・グループの *1* つ を使用できるようになります (Collaboration Capacity Pack は、WebSphere Business Integration Server Express のインストールでは使用できません)。各 WebSphere Business Integration Server Express Plus サーバーで使用するためにインストールできる Collaboration Capacity Pack は 1 つのみです。

Launchpad は、Collaboration Capacity Pack のインストールをガイドする GUI インストーラーを起動するための方法を示します。 コンソール・プログラムは、製品をアンインストールするのに使用できます。サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールも可能です。

この章の内容は以下のとおりです。


- 『Collaboration Capacity Pack のインストール』
- 50 ページの『Collaboration Capacity Pack のアンインストール』
- 51 ページの『次のステップに進む』


サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、 69 ページの『サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストール』を参照してください。

## Collaboration Capacity Pack のインストール

Collaboration Capacity Pack を正常にインストールするには、次に示す前提条件を満足する必要があります。

- OS/400 の場合、ユーザー・プロファイルには `*ALLOBJ` および `*SECADM` 特殊権限が必要です。
- Collaboration Capacity Pack のインストール先にするマシンには、あらかじめ WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールしておく必要があります (Collaboration Capacity Pack は、WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境にはインストールできません)。
- Collaboration Capacity Pack は、InterChange Server Express コンポーネントのインストール先と同じマシンにインストールする必要があります。
- 既存の Collaboration Capacity Pack インストール環境を、インストール時に指定する予定のサーバー・インスタンスと同じサーバー・インスタンス上に構築することはできません。
- QWBISVR44 サブシステムは稼働している必要がありますが、InterChange Server Express インスタンスは停止している必要があります。

Collaboration Capacity Pack のインストール GUI を使用すると、選択したコラボレーション・グループがインストールされ、インストールされた内容が InterChange Server Express に配置されます。

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

Launchpad を呼び出してこのインストール GUI を起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad で、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

   2 つのボタンがある「Capacity Pack のインストール」画面が表示されます。

2. 「**Collaboration Capacity Pack のインストール**」を選択して GUI を起動し、Collaboration Capacity Pack をインストールします。Launchpad は、最初に、WebSphere Business Integration Server Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされているかどうかを検査します。次に、以下のように動作します。
   - InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされていない場合は、インストールが失敗する可能性があることを警告ダイアログによって警告します。「**キャンセル**」を選択してインストールを取り消すか、または「**インストール**」を選択して、インストールを継続します。インストールの継続を選択した場合は、「ようこそ」画面が表示されます。
   - InterChange Server Express がローカル・マシンにインストールされている場合は、「ようこそ」画面が表示されます。

3. 「ようこそ」画面で、「**次へ**」をクリックします。

   「ソフトウェア・ライセンス情報」画面が表示されます。

4. ソフトウェア・ライセンス情報の条件を読み、「**使用条件の条項に同意します。**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

   インストーラーは、このセクションの先頭に記載されている前提条件に適合しているかどうかを検査します。不適合条件がある場合は、「**キャンセル**」ボタンを選択してインストールを取り消すことを強制されます。すべての前提条件が満たされると、「RBAC 情報」画面が表示されます。

5. 「RBAC 情報」画面では、InterChange Server インスタンス名の入力と、このインスタンスの Role-Based Access Control (RBAC) が使用可能になっているかを示すことを要求されます。以下のいずれかを実行します。
   - RBAC が使用可能になっている場合は、「**はい**」の横にあるラジオ・ボタンを選択して、インストール・プロセス中に作成したユーザー名とパスワードの情報を入力します。次に、「**次へ**」を選択します。インストーラーにより、入力した情報が検査されます。
   - RBAC が使用可能になっていない場合は、「**いいえ**」の横にあるラジオ・ボタンを選択して、「**次へ**」を選択します。インストーラーにより、RBAC が使用可能になっていないことが確認されます。RBAC が使用可能であることが確認されると、ユーザー名とパスワードを入力するよう求められます。RBAC が使用可能になっていない場合は、インストール・プロセスが継続されます。

   「フィーチャー (Feature)」画面が表示されます。

6. 「フィーチャー (Feature)」画面で、使用可能なコラボレーション・グループのリストから、名前の横にあるラジオ・ボタンを選択して、コラボレーション・グループを 1 つ選択し、「**次へ**」をクリックします。この画面から選択できるコラ

ボレーション・グループの詳細については、『コラボレーションの選択項目とコンポーネント』を参照してください。

「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面が表示されます。

7. 「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面で、選択内容とインストールの場所を見直し、「**次へ**」をクリックします。

   インストーラーは、インストールに十分なディスク・スペースがあることを検査します。その後、インストールは次のように進行します。

   - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「**次へ**」ボタンが使用不可になります。この場合は、「**戻る**」を選択して、指定のドライブ上の不要なスペースをいくつか削除する必要があります。
   - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。

8. 「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面で、「**終了 (Finish)**」を選択して、インストール GUI を終了します。

インストール・プロセス時に、Collaboration Capacity Pack インストーラーにより、`/QIBM/ProdData/WBIServer44/CollabCP/install.log` というインストール・ログ・ファイルが作成されます。

## コラボレーションの選択項目とコンポーネント

Collaboration Capacity Pack をインストールすると、次の中からコラボレーション・グループを 1 つ選択できます。

- Collaborations for Customer Relationship Management V1.0
- Collaborations for Financials and Human Resources V1.0
- Collaborations for Order Management V1.0
- Collaborations for Procurement V1.0

各コラボレーション・グループは、次に示す個別のコラボレーションを複数集めて構成されます。

- Collaborations for Customer Relationship Management V1.0
  - Collaboration for Contact Manager
  - Collaboration for Contract Sync
  - Collaboration for Customer Manager
  - Collaboration for Customer Credit Manager
  - Collaboration for Installed Product
  - Collaboration for Billing Inquiry
  - Collaboration for Vendor Manager
- Collaborations for Financials and Human Resources V1.0
  - Collaboration for AR Invoice Sync

  - Collaboration for Department Manager
  - Collaboration for Employee Manager
  - Collaboration for GL Movement
  - Collaboration for Invoice Generation
- Collaborations for Order Management V1.0
  - Collaboration for ATP To Sales Order
  - Collaboration for Available To Promise
  - Collaboration for Item Manager
  - Collaboration for Price List Manager
  - Collaboration for Sales Order Processing
  - Collaboration for Order Billing Status
  - Collaboration for Order Delivery Status
  - Collaboration for Order Status
  - Collaboration for Return Billing Status
  - Collaboration for Return Delivery Status
  - Collaboration for Return Status
  - Collaboration for Contact Manager
  - Collaboration for Customer Manager
  - Collaboration for Trading Partner Order Management
- Collaborations for Procurement V1.0
  - Collaboration for Inventory Level Manager
  - Collaboration for Inventory Movement
  - Collaboration for BOM Manager
  - Collaboration for Purchasing
  - Collaboration for Vendor Manager

インストーラーは、対象のコラボレーション・グループに関連するすべてのファイルをインストールします。これには、すべてのコラボレーションが使用する一連の汎用ビジネス・オブジェクトも含まれます。個々のコラボレーションに関する資料は、`http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter` でダウンロード、インストール、および表示することができます。

## Collaboration Capacity Pack のアンインストール

Collaboration Capacity Pack をアンインストールするには、以下の手順を実行します。

1. OS/400 または i5/OS システムのコマンド行で、`QSH` と入力して、対話式の QShell セッションを開始します。
2. 次のコマンドを入力して、Enter キーを押します。

```
java -jar
/QIBM/ProdData/WBIServer44/CollabCP/_uninstCollabCP/uninstall.jar
```

しばらくすると、「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」というテキストが表示されます。

3. **1** を入力して「**次へ**」を選択するか、そのまま **Enter** キーを押して大括弧で囲まれたデフォルトのナビゲーション [1] を確定します。「フィーチャーのアンインストール (Uninstallation Feature)」というテキストが表示されます。インストール済みのコンポーネントが、横に [x] マークが付いた状態で表示されます。
4. 削除の対象にするコンポーネントは選択された状態のままにします。フィーチャーをクリアするか、またはその子を表示するには、番号を入力します。**Enter** キーを押し (または **0** を入力し)、アンインストールを継続します。次に、**Enter** キーをもう一度押して、次のステップに進みます。
5. Collaboration Capacity Pack がインストールされたサーバー・インスタンスが存在する場合、インスタンス名の入力を求めるプロンプトが出されます。コラボレーションのインストール先である InterChange Server 名を入力するか、**Enter** キーを押してデフォルトのサーバー・インスタンスである `QWBIDFT44` を受け入れます。
6. **Enter** キーを押してアンインストールを継続します。「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」というテキストが表示されます。
7. **Enter** キーを押して選択内容を確定します。選択されたコンポーネントがアンインストール・プログラムによって削除されます。「ポストアンインストール・サマリー (Post-uninstallation Summary)」というテキストが表示されます。
8. **Enter** キーを押してアンインストール・プログラムを終了します。

## 次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境に Collaboration Capacity Pack を正常にインストールしたら、次に示す情報を取得するために、「*システム・インプリメンテーション・ガイド*」に進みます。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus またはオプションの Adapter Capacity Pack のインストール時に選択したアダプターの構成。
- コラボレーション・オブジェクト、ビジネス・オブジェクト、およびマップの構成。
- リポジトリーへのオブジェクトの配置。

# 第 8 章 WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus

この章では、WebSphere Business Integration Server Express V4.4 および Express Plus V4.4 にアップグレードする場合の一般的な手順について説明します。この章は次のセクションから構成されます。


- 『サポートされるアップグレード・シナリオと前提事項』
- 57 ページの『既存のシステムの準備』
- 60 ページの『アップグレード・プロセスの開始』
- 60 ページの『WebSphere Business Integration Server Express V4.4 から Express Plus V4.4 へのアップグレード』
- 65 ページの『WebSphere Business Integration Server Express V4.4 を既存インストールの WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 とともに OS/400 または i5/OS にインストールする』
- 65 ページの『WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4 を既存インストールの WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 とともに OS/400 または i5/OS にインストールする』
- 65 ページの『新規のアップグレード・バージョンの始動』
- 66 ページの『アップグレードの検証』
- 66 ページの『アップグレード・バージョンのテスト』
- 67 ページの『アップグレードしたバージョンのバックアップ』
- 67 ページの『次のステップに進む』


## サポートされるアップグレード・シナリオと前提事項

以下のアップグレード・シナリオがサポートされています。

- WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.4 のインストールを Express Plus バージョン 4.4 にアップグレードする。
- WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.4 を既存の Express バージョン 4.3.1 とともに i5/OS にインストールする。
- WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.4 を既存の Express Plus バージョン 4.3.1 とともに i5/OS にインストールする。

以下のアップグレード・シナリオはサポートされていません。

- WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.3.1 のインストールを Express Plus バージョン 4.4 にアップグレードする。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.3.1 のインストールを Express バージョン 4.4 にアップグレードする。

アップグレード手順では、既にインストール済みのコンポーネントはアップグレード用に事前選択され、選択解除することはできません。まだインストールしていな

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

い追加コンポーネントは、アップグレード処理中に選択できます。すべてのアップグレード手順では、以下の条件を前提としています。

- アップグレードを開発環境で実行し、システム・テスト完了後にアップグレード済みソフトウェアを実稼働環境に移行する予定である。
- 該当するすべてのソフトウェアが使用可能である。必要なソフトウェアのリストについては、 24 ページの『ソフトウェア前提条件』を参照してください。
- アップグレード手順は、InterChange Server Express コンポーネントに対して実行するとともに、別々のマシンに存在する場合はさまざまなマシンでインストーラーを実行して、Toolset Express、アダプター、およびサンプル・コンポーネントに対しても実行する。

**注:** この章で WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.3.1 のアップグレードのことを指しているすべての参照資料は、WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.3.1.1 のアップグレードにも適用されます。

## 既存のユーザー・プロジェクトの保存

既存の WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムで定義されたすべてのユーザー・プロジェクトは、ツールとともにローカル・マシンに格納されます。インストーラーを実行して別のバージョンのツールにアップグレードすると、インストーラーは、既存のユーザー・プロジェクトが存在する System Manager ワークスペースへのパスを自動的に認識しません。

すべての System Manager プロジェクト (ユーザー・プロジェクトおよび統合コンポーネント・ライブラリー) を使用可能するには、以下のいずれかを実行します。

- 既存のユーザー・プロジェクトをアップグレードの前にソリューションとして一時的な場所にエクスポートし、アップグレード後に新規のインストール環境にインポートすることにより、既存のユーザー・プロジェクトをマイグレーションする。これが推奨の方法です。
- アップグレード後、System Manager のワークスペース・パスを変更し、元のユーザー・プロジェクトが存在する元のワークスペースの場所を指すようにする。

### 既存のプロジェクトのマイグレーション

既存のプロジェクトをマイグレーションするには、まずプロジェクトをソリューションとして一時的な場所にエクスポートし、その後、新規にアップグレードされた System Manager にインポートして戻します。

#### ユーザー・プロジェクト・ソリューションのエクスポート

ユーザー・プロジェクトと、ユーザー・プロジェクトがソリューションとして参照する統合コンポーネントをエクスポートするには、以下の手順を実行します。

**注:** ソリューションをエクスポートすると、そのソリューション用に選択したユーザー・プロジェクトに含まれる統合コンポーネントとショートカットのみがマイグレーションされます。ユーザー・プロジェクトにショートカットとして含まれない追加の統合コンポーネントもマイグレーションする場合、「システム・インプリメンテーション・ガイド」の『System Manager を使用したパッケージへのコンポーネントのエクスポート』の手順に従ってください。

1. 「WebSphere Business Integration System Manager」ビューで、「**ユーザー・プロジェクト**」フォルダーを展開して「**InterChange Server プロジェクト**」フォルダーを右クリックし、コンテキスト・メニューから「**ソリューションをエクスポート**」を選択します。System Manager により、「ソリューションのエクスポート・ウィザード」が表示されます。
2. エクスポートするコンポーネントを選択するには、以下のオプションのいずれかを実行します。
   - ユーザー・プロジェクトの横にあるチェック・ボックスを使用可能にして、プロジェクト内のすべてのコンポーネントを選択します。
   - コンポーネント・グループの横にあるチェック・ボックスを使用可能にして、グループ内のすべてのコンポーネントを選択します。
   - コンポーネント・グループを強調表示し、右側のペインの個々のコンポーネントの横にあるチェック・ボックスを使用可能にして、これらのコンポーネントを選択します。
3. ソリューションのエクスポート先ディレクトリーの絶対パスと名前を、ウィザード画面の下部にあるテキスト・フィールドに入力するか、または「**参照**」をクリックして、目的のディレクトリーへ移動します。
4. 「**完了**」をクリックします。System Manager により、以下の処理が実行され、ステップ 3 で指定したディレクトリーにソリューションがをエクスポートされます。
   a. ショートカットが格納されている「ユーザー」ディレクトリーが、ソリューションのエクスポート時に選択されたユーザー・プロジェクトに作成されます。
   b. ショートカットによって参照されている統合コンポーネント・ライブラリーのディレクトリーが格納されている「システム」ディレクトリーが、ソリューションのエクスポート時に選択されたユーザー・プロジェクトに作成されます。
5. エクスポート操作が正常に完了したことを示すプロンプトが表示されたら、「**OK**」 をクリックします。

## ユーザー・プロジェクト・ソリューションのインポート

新規更新した System Manager で、以下のステップを実行します。

1. 「ユーザー・プロジェクト」フォルダーを展開し、「**InterChange Server プロジェクト**」を右クリックして、「**ソリューションのインポート**」を選択します。
2. エクスポートされたソリューションが存在するディレクトリーの絶対パスと名前を、「ソリューション・ディレクトリー名」フィールドに入力するか、または「**参照**」をクリックして、目的のディレクトリーへ移動します。
3. 「**完了**」をクリックします。System Manager により、統合コンポーネント・ライブラリーと、エクスポートされたソリューション内で定義されたユーザー・プロジェクトが、使用している環境に作成されます。

## ソフトウェア前提条件のアップグレード

Launchpad インストール・インターフェースは、いくつかの前提条件ソフトウェアを自動的にアップグレードします。ただし、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の現行バージョンによるアップグレードがサポートされている前提条件ソフトウェアより前のバージョンの前提条件ソフトウェアがある場合は、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をアップグレードする前に、前提条件ソフトウェアを手動でアップグレードする必要があります。(サポートされているバージョンの前提条件ソフトウェアについては、http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress/ を参照してください。) 前提条件ソフトウェアは、何らかの他の理由がある場合、手動でアップグレードすることもできます。前提条件ソフトウェアを、現行リリース (WebSphere Business Integration Server Express 4.4) でサポートされているバージョンに手動でアップグレードすると、残りのアップグレードを実行するときに、Launchpad により、現行バージョンの前提条件ソフトウェアがあると検出されます。特定の前提条件ソフトウェアを手動でアップグレードする場合は、そのソフトウェアに用意されているアップグレード手順に従ってください。

以下のセクションでは、いくつかの前提条件ソフトウェアのアップグレード・シナリオや、任意のデータベースを対象に実行が必要な手順について説明します。ソフトウェアのアンインストールまたはアップグレードの前には、 58 ページの『システムのバックアップ』に記載されているステップに従ってください。

### IBM DB2 Universal Database

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus 4.4 for OS/400 and i5/OS では、OS/400 V5R2 または i5/OS V5R3 オペレーティング・システムで提供される IBM DB2 Universal Database (UDB) for iSeries との併用が保証されています。

### IBM WebSphere Application Server

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus バージョン 4.4 は、WebSphere Application Server Express バージョン 6.0 と 5.1.1、および WebSphere Application Server バージョン 6.0 と 5.1.1 をサポートします。WebSphere Application Server Express バージョン 6.0 は、Launchpad がインストールしたバージョンです。

**注:** WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.3.1 および WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.4 の Web ベース・ツールは、OS/400 および i5/OS 上に共存できます。

### IBM WebSphere MQ Server および Client

IBM WebSphere MQ の古いバージョンが、WebSphere Business Integration Express の以前のバージョンでサポートされていた OS/400 または i5/OS システムにインストールされている場合、IBM WebSphere MQ をサポートされるバージョン (MQ 5.3.0.2 CSD09) に手動でアップグレードする必要があります 。MQ の非サポート・バージョンがインストールされていて、アプリケーションで使用されていない場合、その MQ をアンインストールして、Launchpad からサポートされるバージョンをインストールすることができます。

Toolset Express をインストールしている場合、Launchpad は、Windows システムでサポートされる IBM WebSphere MQ がインストールされているかどうかを検出します。サポートされる IBM WebSphere MQ が検出されない場合、Launchpad は自動的に IBM WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD07 をインストールします。

### IBM Java Development Kit

OS/400 または i5/OS システムおよび Windows システムには、IBM Java Development Kit (JDK) 1.4.2 がインストールされている必要があります。OS/400 または i5/OS システムの場合、ライセンス・プログラム 5722JV1 オプション 6 (Java Development Kit 1.4、および Java をインストールするための最新の PTF グループ) がインストールされている必要があります。詳細については、i5/OS サポート Web サイトを参照してください。Windows システムでは、Launchpad が適切な JDK バージョン (Toolset Express に必要なバージョン) をインストールします。前のバージョンを削除する必要はありません。ただし、OS/400 または i5/OS システムでは、Launchpad が適切な JDK をインストールしません。ユーザーが手動でインストールする必要があります。

## 既存のシステムの準備

このシステム・アップグレードでは、以下の手順を実行する必要があります。

- 『システムを静止状態にする』
- 58 ページの『システムのバックアップ』
- 59 ページの『システムのシャットダウン』

### システムを静止状態にする

OS/400 および i5/OS で、システムを WebSphere Business Integration Server Express 4.4 から Express Plus 4.4 にアップグレードするには、その前にシステムが静止状態であることを確認する必要があります。つまり、環境をバックアップしてアップグレード手順を実行する前に、進行中のイベントをすべて完了し、未確定のトランザクションをすべて解決します。

以下の手順では、システムを静止状態にする方法について説明します。

1. 失敗したイベントを再サブミットするか、そのイベントを破棄します (このステップはオプションです)。
2. すべてのコネクターについてイベント表のポーリングを停止するため、コネクターの `PollFrequency` プロパティーを「`No`」に設定して、コネクターを再始動します。
3. 進行中のイベントを含め、システムですべてのイベントを実行します。必ず未確定トランザクションをすべて解決してください。
4. キューから以前のイベントをすべて除去することにより、キューをクリアします。

   **注:** ステップ 4 は、失敗したイベントを処理せずにアプリケーションから再サブミットする場合のみ行ってください。それ以外の場合、キューは空になっているはずですが、念のため再確認してください。

実行中のシステムを正常に停止する方法については、「*システム管理ガイド*」を参照してください。

## システムのバックアップ

OS/400 および i5/OS で WebSphere Business Integration Server Express V4.4 から Express Plus V4.4 にアップグレードしている場合、システムをバックアップしておくと、新規バージョンのインストール時に不注意に上書きしてしまったファイルをリカバリーすることができます。アップグレード手順を実行する前に、静的データと動的データ (アップグレードにかかわらず定期的にバックアップされる変更可能データ) の両方のバックアップを作成します。静的データおよび動的データの例については、表 3 を参照してください。

システムのバックアップを作成するには、以下の手順を行います。

- `repos_copy` ユーティリティーを使用して、現在の InterChange Server Express リポジトリーをバックアップします。例えば、InterChange Server Express インスタンスの名前が `QWBIDFT44` で、セキュリティーが、ログイン名「admin」とパスワード「null」を使用して使用可能になっているとします。次の `repos_copy` コマンドを実行すると、`RepositoryExpress.txt` というファイルにバックアップ・リポジトリー・オブジェクトが作成されます。

  ```
  repos_copy -sQWBIDFT44 -oRepositoryExpress.txt -uadmin -pnull
  ```

- 製品ディレクトリーをバックアップします。このバックアップに組み込まれる重要な項目は、次のようなすべてのカスタマイズ項目です。
  - カスタムの `.jar` ファイル (カスタム・データ・ハンドラーなど) および Java パッケージ。これらは、通常、製品ディレクトリーの `lib` サブディレクトリーにあります。
  - すべての始動スクリプト
  - WebSphere MQ の構成ファイル。*servername* は InterChange Server Express の名前で、OS/400 または i5/OS でのデフォルトは `QWBIDFT44` で、以下のディレクトリーにあります。

    `/QIBM/UserData/WBIServer44/`*servername*`/mqseries/crossworlds_mq.tst`

- IBM では、InterChange Server Express 製品ディレクトリー全体 のシステム・バックアップをとることをお勧めします。OS/400 および i5/OS の場合、これは `/QIBM/UserData/WBIServer44` ディレクトリーで構成されます。
- システム管理者に依頼して、ファイル構造のバックアップを作成します。環境設定およびその他のファイルをコピーする必要があります。
- システム管理者に依頼して、IBM WebSphere MQ のバックアップを作成します。
- データベース管理者 (DBA) に依頼して、データベースのバックアップを作成します。これは、スキーマ情報、ストアード・プロシージャーを含む完全なバックアップでなければなりません。InterChange Server Express リポジトリー・データベースだけでなく、その他のデータベースも使用するためにシステムを構成した場合は、その他のデータベースのバックアップも同様に作成します。

  **注:** このステップを実行するには、適切なデータベース・ユーティリティーを使用します。例えば、DB2 にはエクスポート・ユーティリティーが用意されています。手順については、データベース・サーバーの資料を参照してください。

表 3 に、各コンポーネントのバックアップ方法の概要を示します。

*表 3. データのバックアップ方法*

| データのタイプ | バックアップ方法 |
| --- | --- |
| **静的データ** | |
| リポジトリー | repos_copy ユーティリティーを使用し、カスタマイズしたシステム・コンポーネントの一部またはすべてを保管します。詳細については、「システム管理ガイド」に記載されているコンポーネントのバックアップ方法を参照してください。 |
| カスタムのマップ Java クラス・ファイル (.class) | これらのファイルをシステム・バックアップに組み込むため、システム・バックアップに下記のディレクトリーがあることを確認してください。*ProductDir*¥DLMs |
| カスタム・コネクター | システム・バックアップにディレクトリー *ProductDir*¥connectors¥*connector_name* を含めます。ここで、「*connector_name*」はカスタム・コネクターの名前です。 |
| カスタマイズされた始動スクリプト | 始動スクリプトをカスタマイズしてある場合は、これらがシステム・バックアップに組み込まれていることを確認してください。 |
| InterChange Server Express 構成ファイル (InterchangeSystem.cfg) | /QIBM/UserData/WBIServer44/*servername* ディレクトリー (*servername* は InterChange Server Express 名) にある InterChange Server Express 構成ファイルをシステム・バックアップに組み込みます。QWBIDFT44 は、OS/400 および i5/OS でのデフォルトです。 |
| **動的データ** | |
| 相互参照表、失敗したイベントの表、および関係表 | データベースにはデータベース・バックアップ・ユーティリティーを使用します。詳細については、「システム管理ガイド」に記載されているシステム・コンポーネントのバックアップ方法を参照してください。 |
| コネクター・イベント・アーカイブ表 | これらの表を含むデータベースには、データベース・バックアップ・ユーティリティーを使用します。 |
| ログ・ファイル | /QIBM/UserData/WBIServer44/*servername*/DLMs ディレクトリー (*servername* は InterChange Server Express 名) をシステム・バックアップに組み込みます。QWBIDFT44 は、OS/400 および i5/OS でのデフォルトです。 |

## システムのシャットダウン

バックアップが完了して、WebSphere Business Integration Server Express V4.4 から Express Plus V4.4 にアップグレードする場合、以下の手順でシステムをシャットダウンする必要があります。

1. InterChange Server Express とその関連コンポーネントをシャットダウンします。
2. CL コマンド ENDSBS SBS(QWBISVR44) OPTION(*CNTRLD) を使用して、QWBISVR44 サブシステムを終了します。

   **注:** または、QSH シェルか CL から以下のコマンドを発行して、準備中の WebSphere Business Integration Express サーバーのインスタンスをシャットダウンのために終了させます。
   /QIBM/ProdData/WBIServer44/bin/stop_server_gracefully.sh *serverName*。*serverName* は、サーバー・インスタンスの名前に一致します。
3. CL コマンド WRKMQM を使用して、MQ キュー・マネージャーを終了します。キュー名を探してオプションを選択し、キュー・マネージャーを終了します。

queueName は、*serverName*.QUEUE.MANAGER です (*serverName* は Interchange Server Express のインスタンス名)。デフォルトのサーバー名は QWBIDFT44 であるため、queueName は QWBIDFT44.QUEUE.MANAGER になります。*serverName* は、queueName では、名前の残りの部分とともにすべて大文字で指定されます。これは必須事項です。

**注:** キュー・マネージャー名は必ずしも *serverName*.QUEUE.MANAGER である必要はありません。指定されたカスタム・キュー名にすることもできます。

システムのシャットダウンの詳細については、「*システム管理ガイド*」を参照してください。

## アップグレード・プロセスの開始

システムを静止状態にしてバックアップを作成したら、アップグレード手順を安全に開始できます。システムのアップグレードでは、以下の作業を行います。

- 『WebSphere Business Integration Server Express V4.4 から Express Plus V4.4 へのアップグレード』
- 65 ページの『新規のアップグレード・バージョンの始動』

### WebSphere Business Integration Server Express V4.4 から Express Plus V4.4 へのアップグレード

システムを静止状態にしてバックアップを作成したら、アップグレード手順を安全に開始できます。Launchpad から、WebSphere Business Integration Server Express V4.4 から Express Plus V4.4 へのアップグレードをガイドする GUI インストーラーを起動することができます。GUI インストーラーの処理内容は次のとおりです。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品のコンポーネントをインストールし、サービスとして構成します。
- 選択した新規アダプターすべてをインストールし、サービスとして構成します。
- 既存のデータベースを削除しません。
- 既存のリポジトリーを保存しますが、再配置はしません。

Launchpad を呼び出して GUI インストーラーを起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列にある「**製品のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

   「製品のアップグレード」画面が表示されます。
2. 「製品のアップグレード」画面で、「**次へ**」をクリックします。

   「サーバーのインストール」画面が表示されます。
3. 「サーバーのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。
   - バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストール済みの場合は、「**InterChange Server Express**」項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「**次へ**」を選択します。
   - バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールしていない 場合は、「**InterChange Server Express**」項目の横にあるチェ

ック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つの方法のうち、いずれか一方を選択して次に進むことができます。

– 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールする。

– チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。

「**次へ**」を選択します。

「ツールのインストール」画面が表示されます。管理ツールをインストールすると、WebSphere Business Integration Console for OS/400 and i5/OS もインストールされます。

4. 「ツールのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。

- バージョン 4.4 の Toolset Express 管理ツールと開発ツールがインストールされている場合は、「**管理ツール**」項目と「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「**次へ**」を選択します。

- バージョン 4.4 の Toolset Express 管理ツールのみがインストールされている場合は、「**管理ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスは選択されて使用不可になり、「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスは選択されて使用可能になっています。次の 2 つの方法のうち、いずれか一方を選択して次に進むことができます。

  – 「**開発ツール**」項目を選択された状態のままにし、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 の開発ツールをインストールする。

  – チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の開発ツールがインストールされていない状態を維持する。

  「**次へ**」を選択します。

  **注:** 開発ツールのみをインストールすることはできません。開発ツールをインストールするには、管理ツールもインストールする必要があります。

- バージョン 4.4 の Toolset Express 管理ツールと開発ツールがインストールされていない 場合は、「**管理ツール**」項目と「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスは選択され、使用可能になっています。次の 3 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。

  – 両方のチェック・ボックスを選択した状態のままにし、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 の管理ツールと開発ツールをインストールする。

  – 「**管理ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択した状態のままにし、「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の管理ツールのみをインストールする。

  **注:** 開発ツールのみをインストールすることはできません。開発ツールをインストールするには、管理ツールもインストールする必要があります。

– 両方のチェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の管理ツールと開発ツールがどちらもインストールされないようにする。

**ヒント:** 最初に「**開発ツール**」の横にあるチェック・ボックスを選択解除します。これにより、「**管理ツール**」の横にあるチェック・ボックスが使用可能になり、チェック・ボックスを選択解除できるようになります。

「**次へ**」を選択します。

「Web ベース・ツールのインストール」画面が表示されます。

5. Web ベース・ツールには、System Monitor、Failed Event Manager、および Web Deployment が含まれます。これらのツールの詳細については、「システム・インプリメンテーション・ガイド」を参照してください。

   Web ベース・ツールが動作するには、OS/400 または i5/OS システム上に、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express、および IBM HTTP Server のサポートされるバージョンが存在している必要があります。Web ベース・ツールが選択されていると、インストール・プロセスの後半で、Launchpad によって、これらの前提条件がインストールされているかどうかが通知されます。また、インストールされていない場合、インストールするように指示するプロンプトが出されます (WebSphere Application Server Express 6.0 は Launchpad からインストールできます。IBM HTTP Server は OS/400 または i5/OS システムとともに提供されますが、個別にインストールする必要があります)。

   - チェック・ボックスを選択したままにし、Web ベース・ツールをインストールします。
   - Web ベース・ツールをインストールしない場合は、チェック・ボックスを選択解除します。

   「**次へ**」を選択します。

   「アダプターのインストール」画面が表示されます。

6. バージョン 4.4 のアダプターをインストール済みの場合は、「アダプターのインストール」画面の各インストール済みアダプターの横にあるチェック・ボックスは選択され、使用不可になっています。さらに、Adapter for JText をまだインストールしていない場合、このアダプターは System Test サンプルを実行するときに必要であるため、このアダプターはデフォルトで選択されています。(System Test サンプルは、ステップ 7 (63 ページ) で説明した、「サンプルのインストール」画面から選択できるサンプル・コンポーネントの一部です。) 以下のいずれかを実行します。

   - 既にインストールされているアダプター以外にはアダプターをインストールしない場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェック・ボックスを選択解除 (解除が必要な場合) して、「**次へ**」を選択します。
   - 既にインストールされているアダプター以外にインストールするアダプターを Adapter for JText のみにする場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェック・ボックスを選択したままにし、「**次へ**」を選択します。
   - Adapter for JText およびインストール済みのアダプターに加えてその他のアダプターをインストールする場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェッ

ク・ボックスを選択したままにし、追加する他のアダプターの横にあるチェック・ボックスを選択して、「**次へ**」を選択します。

「サンプルのインストール」画面が表示されます。

7. 「サンプルのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。
   - バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストール済みの場合は、「**サンプル**」項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「**次へ**」を選択します。
   - バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストールしていない 場合は、「**サンプル**」項目の横にあるチェック・ボックスにチェックマークが付けられ、使用可能になっています。次の 2 つの方法のうち、いずれか一方を選択して次に進むことができます。
     - 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストールする。
     - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。

   「**次へ**」を選択します。

   **注:** サンプル・コンポーネントをインストールするには、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter のインストールが必要です。そのため、サンプル・コンポーネントのインストールを選択すると、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter は、ユーザーが前の画面でこれらのインストールを選択したかどうかにかかわらず、インストールされます。

   「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

8. 「ソフトウェア前提条件」画面では、インストーラーによって必要な前提条件が通知されます。以下のいずれかを実行します。
   - 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件が必要ないと表示された場合は、ステップ 9 に進みます。
   - 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件ソフトウェアが必要であると表示された場合、前提条件ソフトウェアのインストール方法の説明については、ステップ 3 (12 ページ) を、追加の前提条件ソフトウェア情報については、 24 ページの『ソフトウェア前提条件』のセクションを参照してください。
9. 「ソフトウェア前提条件」の下部にある「**製品のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

   「ソフトウェア・ライセンス情報」画面が表示されます。

10. ソフトウェア・ライセンス情報の条件を読み、「**使用条件の条項に同意します。**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

    次のいずれかの処理が実行されます。
    - InterChange Server Express コンポーネントが既にインストールされており、アップグレードされる予定であるか、またはアップグレード時に InterChange

Server Express コンポーネントをインストールする場合、インストーラーは、適切な前提条件ソフトウェアが存在し、正常に構成されていることを検査します。

– 前提条件が満たされていない場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。

– 前提条件が満たされた場合は、製品のインストールが開始します。この場合、ステップ 11 から手順を続行します。

11. インストール・プロセスが開始すると、インストーラーは、インストール用に十分なディスク・スペースがあるかどうかを検査します。

    - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「**次へ**」ボタンが使用不可になります。この場合は、「**戻る**」を選択していくつかの機能またはサブ機能を選択解除するか、指定したドライブの不要なスペースを削除します。
    - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。多数の通知画面が表示されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。「**終了 (Finish)**」を選択して、GUI を終了します。

## インストールの要約

インストール・プロセスによって完了したタスクは、Launchpad で選択したフィーチャーに応じて、次のようになります。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus の製品コンポーネントがインストールされた。
- Toolset Express が使用する `Cwtools.cfg` ファイルが構成された。
- InterChange Server Express for OS/400 and i5/OS が使用する。`InterchangeSystem.cfg` ファイルが構成された。
- WebSphere MQ のキュー・マネージャーが構成された。
- InterChange Server Express が、TCP/IP 自動サーバーとともに自動的に始動するように構成された。
- プラットフォーム固有の構成および登録が提供された。
- コンテンツが InterChange Server Express に配置された。

この時点で、31 ページの『ディレクトリー構造およびファイル』に示すシステムのファイルおよびディレクトリー構造を見ることができます。

OS/400 および i5/OS のインストールのインストール・プロセスに関する情報が含まれるログ・ファイルが 1 つあります。`install.log` ファイルで、これは `/QIBM/ProdData/WBIServer44/` ディレクトリーに配置されています。

## WebSphere Business Integration Server Express V4.4 を既存インストールの WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 とともに OS/400 または i5/OS にインストールする

現在、OS/400 または i5/OS に WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 がインストールされている場合、WebSphere Business Integration Server Express V4.4 を以前のバージョンとともにインストールできます。この 2 つのバージョンは OS/400 および i5/OS 上に共存が可能で、同時に実行することができます。WebSphere Business Integration Server Express V4.4 のインストールによって WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 のインストールが変更されることはありません。

WebSphere Business Integration Server Express V4.4 のインストール時に、Launchpad が WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 のインストールを検出します。この場合、WebSphere Business Integration Server Express V4.4 の InterChange Server Express のデフォルト部分が、14501、1417、および 4443 に変更されます。

WebSphere Business Integration Server Express V4.4 のインストールに関する固有の情報については、本書の第 1 章から第 7 章を参照してください。

## WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4 を既存インストールの WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 とともに OS/400 または i5/OS にインストールする

現在、OS/400 または i5/OS に WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 がインストールされている場合、WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4 を以前のバージョンとともにインストールできます。この 2 つのバージョンは OS/400 および i5/OS 上に共存が可能で、同時に実行することができます。WebSphere Business Integration Server Express Express Plus V4.4 のインストールによって WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 のインストールが変更されることはありません。

WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4 のインストール時に、Launchpad が WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 のインストールを検出します。この場合、WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4 の InterChange Server Express のデフォルト部分が、14501、1417、および 4443 に変更されます。

WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4 のインストールに関する固有の情報については、本書の第 1 章から第 7 章を参照してください。

## 新規のアップグレード・バージョンの始動

インストールが完了したら、以下の手順を実行することにより、既存のバージョンのリポジトリーを使用して WebSphere Business Integration Server Express Plus システムを開始できます。

1. 必要なすべてのサポート・ソフトウェアが稼働していることを確認します。サポート・ソフトウェアには WebSphere MQ が含まれます (キュー・マネージャーとリスナーの両方が稼働中であることを確認してください)。
2. InterChange Server Express を始動します。InterChange Server Express を始動する方法の手順については、 37 ページの『WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動』を参照してください。

   `InterchangeSystem.log` ファイルは、デフォルトのインスタンスの `/QIBM/UserData/WBIServer44/QWBIDFT44/log` ディレクトリーで確認できます。

   **注:** システムのアップグレード後に InterChange Server Express の始動に失敗した場合は、このアップグレード手順を調べて、すべての指示に従ったかどうかを確認してください。それでも失敗の原因が不明であれば、修正しようとしたり、バックアップから復元する前に、IBM テクニカル・サポートにお問い合わせください。

## アップグレードの検証

アップグレードが正常に処理されたかを検証するには、リポジトリー・スキーマが作成され、すべてのオブジェクトが正常にロードされたかどうかを確認します。System Manager が稼働しているマシンで、次の作業のいくつかを実行する必要があります。

- WebSphere MQ キューが、エラーがなく正常に作成されロードされていることを検証します。System Manager の「サーバー」メニューから「統計」を選択して、すべてのキューが適切な場所にあることを確認します。
- すべてのコネクターが指定のキューを正常に検索したことを検証します。System Manager の「サーバー」メニューから「システム表示」を選択して、コネクターの横のアイコンが青信号になっていること、およびコネクターの状況が「非アクティブ」であることを確認します。
- すべてのコネクターとビジネス・オブジェクトが System Manager に正常に表示されることを確認します。
- System Manager の「ツール」メニューから「Log Viewer」を選択して、ログ・ファイルのエラーをチェックします。

  Quick Validate プロシージャーを実行することにより、アップグレードが正常に実行されたかどうかも確認できます。このプロシージャーの命令は、First Steps インターフェースの「Quick Validate」ボタンをクリックすると開始できます。詳細については、 41 ページの『第 5 章 インストールの検証』を参照してください。

  **重要:** ログ・ファイルにエラーが存在する場合は、そのエラーを解決してから、作業を継続してください。

## アップグレード・バージョンのテスト

アップグレードしたシステムを開発から実動に移行する前に、IBM では、実動時のすべてのインターフェースおよびビジネス・プロセスについてテストを行うことをお勧めします。システムのテストでは、以下の項目について調べます。

- **コネクター**: 各コネクターを始動して、コネクターの接続性をテストします。構成変更が行われていることを確認してください。コネクター・ログ・ファイルでは、コネクターが指定のアプリケーションに接続できることを確認します。
- **スクリプトおよびストアード・プロシージャー**: スクリプトおよびストアード・プロシージャーは、アップグレードされた場合のみテストする必要があります。スクリプトは、新規ディレクトリー・パス・ロケーションを含むように変更する必要があります。
- **ボリュームおよびパフォーマンス**: 過去にパフォーマンス測定が行われていれば、新たにパフォーマンス測定を行い、両方の結果を比較して、システムが安定していることを確認します。

## アップグレードしたバージョンのバックアップ

アップグレード・プロセスが完了したら、WebSphere Business Integration Server Express Plus システムのバックアップを作成します。 58 ページの『システムのバックアップ』を参照してください。

## 次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express Plus へのアップグレードは完了しました。オプションの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールするには、次のいずれかを実行する必要があります。

- オプションの Adapter Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、 43 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に進みます。
- オプションの Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、 47 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進みます。

# 付録. サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus、Adapter Capacity Pack、または Collaboration Capacity Pack のインストールおよびアンインストールは、提供されている GUI を使用せずに実行できます。サイレント・インストールおよびアンインストールは、コマンド行から実行します。

サイレント・インストールでは、通常、インストーラーの実行時に手動で指定する応答は、付属のテンプレート応答ファイルに格納されます。このファイルは、その後コンポーネントをインストールする実行可能プログラムによって読み取られます。実行可能プログラムを実行する場合は、先にこの応答ファイルに必要な変更を必ず実行してください。手順については、応答ファイルを参照してください。

サイレント・アンインストールでは、応答ファイルの使用が必要な場合とそうでない場合があります。

この章の内容は以下のとおりです。


- 『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール』
- 70 ページの『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール』
- 70 ページの『Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール』
- 71 ページの『Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール』
- 71 ページの『Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール』
- 72 ページの『Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール』


Windows クライアント上にインストールされている WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus コンポーネントのサイレント・インストールまたはサイレント・アンインストールについての情報は、「*WebSphere Business Integration Server Express インストール・ガイド (Windows 版)*」を参照してください。

## WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus をサイレント・インストールするための応答ファイルは、CD ルートの `Launchpad` ディレクトリーに置かれており、次のように名前が付けられています。

- WebSphere Business Integration Server Express のサイレント・インストールの場合:
  - `WBIServerExpressResponseFile_iSeries.txt`
- WebSphere Business Integration Server Express Plus のサイレント・インストールの場合:

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

– WBIServerExpressPlusResponseFile_iSeries.txt

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. 応答ファイルを CD メディアから任意のディレクトリーにコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。

   **注:** 応答ファイルに -P expressAdaptersFeature.active=true と設定すると、すべてのアダプターをインストールできるようになります。アダプターを個別にインストールするには、目的のアダプター・フィーチャーのそれぞれを true に設定して、-P expressAdaptersFeature.active=false を設定します。

2. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
3. コマンド行で、次のコマンドを発行します。

   ```
   CD_drive_letter¥Launchpad¥iSeriesInstaller.exe -silent -options ¥
   response_file_name
   ```

   必要に応じて、コマンド行に OS/400 または i5/OS のログイン情報を次のように入力し、ログイン情報の入力を求めるプロンプトが出ないようにすることができます。

   ```
   CD_drive_letter¥Launchpad¥iSeriesInstaller.exe system userID password ¥
   -silent -options response_file_name
   ```

## WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のすべてのコンポーネントをサイレント・アンインストールするには、次の手順を実行します。

1. 次のディレクトリーに移動します。
   - WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境で、/QIBM/ProdData/WBIServer44/product/_uninstWBIServerExp に移動します。
   - WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境で、/QIBM/ProdData/WBIServer44/product/_uninstWBIServerExpPlus に移動します。
2. QShell で、次のコマンドを発行します。

   ```
   java -jar uninstall.jar -silent
   ```

## Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール

Adapter Capacity Pack のサイレント・インストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は、adaptercp_silent_iseries.txt で、このファイルは、CD のディレクトリー AdapterCapacityPack に置かれています。

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. 応答ファイルを CD メディアから任意のディレクトリーにコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。
2. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。

3. コマンド行で、次のコマンドを発行します。

```
CD_drive_letter¥AdapterCapacityPack¥iSeriesInstaller.exe -silent   ¥
-options adaptercp_silent_iseries.txt
```

必要に応じて、コマンド行に OS/400 または i5/OS のログイン情報を次のように入力し、ログイン情報の入力を求めるプロンプトが出ないようにすることができます。

```
CD_drive_letter¥AdapterCapacityPack¥iSeriesInstaller.exe system  ¥
userID password -silent -options adaptercp_silent_iseries.txt
```

## Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール

Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は adaptercp_silent_uninst.txt で、このファイルは、OS/400 または i5/OS システムの次のディレクトリーに置かれています。

```
/QIBM/ProdData/WBIServer44/AdapterCapacityPack
```

サイレント・アンインストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. adaptercp_silent_uninst.txt 応答ファイルを /QIBM/ProdData/WBIServer44/AdapterCapacityPack から /QIBM/ProdData/WBIServer44/AdapterCapacityPack/_uninstAdapterCP ディレクトリーにコピーします。
2. アンインストールに必要な設定について応答ファイルを変更します。
3. OS/400 または i5/OS コマンド行で QSH とタイプして QShell を入力し、ディレクトリーを /QIBM/ProdData/WBIServer44/AdapterCapacity Pack/_uninstAdapterCP に変更します。
4. コマンド行で、次のコマンドを発行します。

```
java -jar uninstall.jar -silent -options adaptercp_silent_uninst.txt
```

## Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール

Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は、collabcp_silent_iseries.txt で、このファイルは、CD のディレクトリー CollabCapacityPack に置かれています。

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. 応答ファイルを CD メディアからコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。
2. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
3. コマンド行で、次のコマンドを発行します。

```
CD_drive_letter¥CollabCapacityPack¥iSeriesInstaller.exe -silent   ¥
-options collabcp_silent_iseries.txt
```

必要に応じて、コマンド行に OS/400 または i5/OS のログイン情報を次のように入力し、ログイン情報の入力を求めるプロンプトが出ないようにすることができます。

```
CD_drive_letter¥CollabCapacityPack¥iSeriesInstaller.exe system  ¥
userID password -silent -options collabcp_silent_iseries.txt
```

## Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール

Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は `collabcp_silent_uninst.txt` で、このファイルは OS/400 および i5/OS の `/QIBM/ProdData/WBIServer44/CollabCP` ディレクトリーに置かれています。

Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストールを実行するには、次の手順を実行します。

1. collabcp_silent_uninst.txt 応答ファイルを `/QIBM/ProdData/WBIServer44/CollabCP` から `/QIBM/ProdData/WBIServer44/CollabCP/_uninstCollabCP` にコピーします。
2. OS/400 および i5/OS コマンド行で `QSH` とタイプして QShell を入力し、ディレクトリーを `/QIBM/ProdData/WBIServer44/CollabCP/_uninstCollabCP` に変更します。
3. QShell コマンド行で、次のコマンドを発行します。

   ```
   java -jar uninstall.jar -silent -options collabcp_silent_uninst.txt
   ```

# 特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

*〒106-0032*
*東京都港区六本木 3-2-31*
*IBM World Trade Asia Corporation*
*Licensing*

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態で提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

*IBM Corporation*
*577 Airport Blvd., Suite 800*
*Burlingame, CA 94010*
*U.S.A*

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があり、単に目標を示しているものです。本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。著作権表示: 本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

## プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報は、提供されている場合、このプログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立つことを目的としています。一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

**重要:** 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

## 商標

以下は、IBM Corporation の商標です。
i5/OS
IBM
IBM ロゴ
AIX
CICS
CrossWorlds
DB2
DB2 Universal Database
IMS
Informix
iSeries
Lotus
Lotus Domino
Lotus Notes
MQIntegrator
MQSeries
MVS
OS/400
Passport Advantage
SupportPac
WebSphere
z/OS

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。
MMX および Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。
Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。
Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。
他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus には、Eclipse Project (http://www.eclipse.org/) により開発されたソフトウェアが含まれています。

WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.4、および WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.4

# 索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

## [ア行]


アップグレード
- アップグレード・プロセスの開始 60
- 既存システムの準備 57
- 検証 66
- サポートされるアップグレード・シナリオと前提事項の特定 53
- システムのバックアップ 58
- テスト 66
- WebSphere Business Integration Server Express Plus の開始 65
- WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express Plus V4.3.1 へ 60

アンインストール
- Adapter Capacity Pack 45
- Collaboration Capacity Pack 50
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus 34

インストール
- 概要 1
- Adapter Capacity Pack 43
- Collaboration Capacity Pack 47

応答ファイル
- Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール 71
- Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール 70
- Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール 71
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール 69


## [カ行]


「カスタム」インストール 16

起動
- Launchpad 4

「クイック・スタート・ガイド」、表示 41


## [サ行]


サイレント
- Adapter Capacity Pack のアンインストール 71
- Adapter Capacity Pack のインストール 70
- Collaboration Capacity Pack のアンインストール 72
- Collaboration Capacity Pack のインストール 71
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール 70
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストール 69

システムのシャットダウン 59

システムのバックアップ 58

始動
- InterChange Server Express 37
- System Manager 38
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus 37


## [タ行]


次のステップに進む
- システムのアップグレード 41
- ソフトウェア前提条件の検査およびインストール 5
- Adapter Capacity Pack のインストール 41
- Collaboration Capacity Pack のインストール 41, 46
- Launchpad の基本機能の学習 2
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus インストールの検証 40
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus の始動 36

登録、InterChange Server Express の 38


## [ハ行]


パスワード、InterChange Server Express、変更 39

表記上の規則 vi

「標準」インストール 10


## [ラ行]


リモート・データベース 26

ローカル・データベース 26

ログ・ファイル
- Adapter Capacity Pack のインストール 45
- Collaboration Capacity Pack のインストール 49

ログ・ファイル、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus インストール 33


## A


Adapter Capacity Pack
- サイレント・アンインストール 71
- サイレント・インストール 70
- GUI を使用したアンインストール 45
- GUI を使用したインストール 43


## C


Capacity Pack
- アダプター 43
- コラボレーション 47

Collaboration Capacity Pack
- サイレント・アンインストール 72
- サイレント・インストール 71
- GUI を使用したアンインストール 50
- GUI を使用したインストール 47


## D


DB2
- 最小基準 26


## F


Failed Event Manager
- ディレクトリーのロケーション 33

First Steps の起動 28


## I


InterChange Server Express
- 始動 37
- 登録 38
- パスワードの変更 39
- System Manager への接続 39


© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

## L

Launchpad
「クイック・スタート・ガイド」の表示 41
Adapter Capacity Pack のインストール 43
Collaboration Capacity Pack のインストール 47
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストール 10

## S

System Manager
始動 38
InterChange Server Express への接続 39
System Monitor
ディレクトリーのロケーション 33

## W

Web Deployment
ディレクトリーのロケーション 33
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus
インストールの検証 41
サイレント・アンインストール 70
サイレント・インストール 69
始動 37
ディレクトリー構造 31
GUI を使用したアンインストール 34
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストールの検証 41

Printed in Japan

日本アイ･ビー･エム株式会社
〒106-8711　東京都港区六本木3-2-12